静寂の海、ほとりの花

yz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静寂の海、ほとりの花

【Ｎコード】

Ｎ７３００Ｔ

【作者名】

ｙｚ

【あらすじ】

人類が太陽系外へと移住する時代。月に永住することを決めた老人と壊れたアンドロイドの話。

ビー玉

夜中にぽつりと眼が覚めた。

じっとりと汗が滲むほど暑苦しい部屋の中。いずれ夢寐の間に戻るであろうと、青白い光差す窓をじっと見てその時を待っていた。しかし、その光を見ているうちに私は意識がはっきりと覚醒し、眠りにつくまで時間がかかりそうなことに気付いた。起き上がり足音静かに冷蔵庫へ向かう。この家の住人は私だけで隣の家まで数キロと離れている。大きな音を出しても一向に構わないはずなのだ。けれど夜は静かに行動しなければならない、という今まで意識せずに半生守り続けた習慣は中々抜けない。そしてやはり冷蔵庫を静かに開け、ラムネを取り出した。こういう時はアルコール飲料が最適なのかもしれないが、私の身体は生まれてこの方、アルコールを受け付けない。いつも飲むとなればこの果糖と炭酸を混ぜ合わした時代錯誤な清涼飲料水だった。

私はラムネのビンを片手に外へ出た。

玄関から真っ直ぐに町への道が伸びており、電燈が青白く道を照らしていた。

今夜は暑く、月海からの風が心地よい。私はその海風に導かれるように家の裏の浜辺へ降た。砂というより礫に近い浜辺で腰掛けるに丁度いい岩を見つけるとそこに腰掛け、夜空に大きく青く煌く地球を見た。地球はどこまでも青く輝き、その大洋を鏡にして、この月面を青く照らしている。私はラムネの蓋を開け、甘い炭酸の清涼感を楽しむ。

ビンを口につけようと、傾けるたびにカラカラとビンの中でビー玉が踊る。子どもの頃このラムネのビー玉が欲しくてたまらなかった

ことを思い出し、私はラムネを飲み干した後、ビー玉を取り出すべくビンの蓋を思いっきり回した。プラスチック製の蓋は思ったより簡単にとれ、勢い余ってビー玉は浜へとぽろりと落ち、かつん、かつんと小石に当たった。私は罅(ひび)でも入ってないかと慌ててビー玉を拾い、手の平で転した後、覗き見た。地球光に照らされ一層青白く光る硝子玉があるばかりで、罅(ひび)は入っておらず、ただ青々と輝くばかりだった。

子どもの頃の私は一体このガラス製の球体の何に執着していたのだろう。この煌めきに何を見ていたのだろう。今の私には昔あったはずの執着も視界もなく、そのビー玉はあくまで硝子製の玉で何の感慨も起こらない。そんな自分自身を静かに眺めていた。

ビー玉に見飽きるとポケットにしまい、私は辺りを見渡した。地球光に青く照らされ、静かにたゆたう月の海、夜空には星々の光を打ち消して大きな地球がこちらを見ている。遠く浜辺の向こうの崖には巨大で錆び付いた風車が地球光に照らされた海からの風にゆっくりと回っていた。その地中の奥底では今でも斜長岩を虚しく掻いているのだろうか。そしてその崖の向こうではこの月の創世記以来、光の当たらぬ月の裏の永久影が黒い壁を作っていた。

ここでは何もかもが終わっていた。
資源は掘りつくされ、太陽系諸惑星の地球化計画の実験台となった後は訪れる人も滅多にいない。いるのはかつてこの月へ永住をした人たちの末裔……それは私のような老人ばかりだった。
それ以外は月で細々と研究を続けている陰気な科学者くらいだ。

そして地球化の維持管理ももはや何の利益にもならないという理由で年々外され、後数十年でもとの大気のない白い沙漠となるらしい。

余命あと僅かな私にとって、全てを終えるには丁度いい場所だった。

白鷺

月に住んでから真夏を三回ほど経験したが今朝のような濃い霧を見たのは始めてだった。
窓を開けるとどこまでも白い霧が世界を覆いつくしている。私はその情景を見ながら珈琲を淹れた。月に気の利いた銘柄の珈琲はない。店の方でも珈琲売り場には二、三銘柄の安いインスタントが申し訳なさそうに置いてあるばかりだった。一応全ての銘柄を試したがそのどれもあまり代わり映えのなかった。お湯を沸かしてお気に入りの珈琲カップに注ぎ、眠気覚ましに一杯を飲んだ。

珈琲自体はただの安物の即席物だが、珈琲を飲むという行為はただ珈琲を飲むだけではない。そこには風景があり、においがあり、心象が横切るものだ。それらを引き立たせてくれるのが私にとってお気に入りの珈琲カップだった。

この珈琲カップはまだ私が若い頃、中古品として購入したもので白磁に薔薇の花と蔦が描かれたものだったが、今ではその薔薇の花も赤くはなくどこか赤茶色に枯れた色合いになり、白磁の底は長年珈琲カップとして使い続けてきたため薄くセピア色に染まっていた。そのさびれた様子が逆に私の心を惹いて止まない。他人の目にはこのカップは古びたカップに見えるかもしれない。しかし、私にとってこのカップに描かれているものは少年時代に美しいと心に刻まれた薔薇の花だった。あの時見た花も蔦も私の心の過去に残っている風景と同じく今この手の中に色あせ掠れて残っているのだ。

外の霧を眺めながら珈琲を飲み、時折カップを持った手に色あせた薔薇を感じる。そこには独自のサビとにおいがあった。サビとにおいを追い求めるのが茶道や俳道の奥底らしい。知識としてそれらは

存在していたが、それを心底楽しむ作法を学ぶことなく今にいたる。しかし、このサビとにおいは私に安らぎをもたらしてくれている。そもそもそういった作法や学問を学び、その道の深遠を見てしまったら、こんな安物のサビとにおいでは満足できなくなっていたかもしれない。結局、私はどういうものでもいいから私自身にあったものがあればそれでよいのだ。飽きずに私が感じる事のできる価値があればそれでいい。即席の珈琲と中古の白磁、それに飽きが来ないし、充分に生きた価値をもっている。

ふと外を見ると家の隣にある潟とも池とも呼べない水溜りに一羽の白鷺がゆっくりと深い霧の中から現れた。そして辺りを見渡しながら何か忘れ物でも探るように水の中へくちばしを刺していた。その様子を私は見ながら珈琲を飲み終わった。ふと、この高原の朝の澄んだ空気を思わせる霧を遮断している窓硝子が厭わしくなり白鷺を脅さないようにゆっくりと開けた。しかし、窓は軋んだ音を立て、その音に驚き白鷺は濃霧の大気を鷲掴むように大きく翼を羽ばたかせ、再び霧の中へ消えていった。

○

私は作家だった。

作家というには語弊があるかもしれない。作家というより売文家と言った方があっている。ただ文章を売り物にしていた。常に文章を前に考える事といえば、この文章をどうしたら人は読んでくれるのか、また手に取った人をどう楽しませるか。それだけだった。若かりし頃は情熱を持って書いていた。私は今の世相を鋭く切り取りった小説を書き、読んだ人の中に感動を呼び起こし、読者に自らの盲目を気付かせ、心を啓かせこの世を変えるだけのものを書くのだと。

しかし、職業として物書きとなると文学というものには程遠く、ただ生活のために、いかに売れるかしか考えなくなっていった。職業として書くのだ当たり前のことといえば、当たり前のことだろう。しかし、ある時一抹の情熱すらなくなっている自分を発見した。しかし私はその発見により落胆するわけでもなく、ただその現実を眺め「仕方ない」と割り切れた。その時はそのまま過ぎていったが、よくよく考えればそれが転機だったのかもしれない。その時私は最後に再び情熱を持って文に望む最後の機会を失い、ただ売るための文を書くことになったのだ。

そうして今、月に来て年金暮らしをするようになってから再び筆を執った。

今は誰に読ませるわけでもなくただ自らのために執筆をしている。朝食が終わるとテーブルにノートパソコンを置き執筆を開始した。書いている物語は冬虫夏草を身に宿したモズ（蝉の幼虫）の話だ。

モズは幼い時に冬虫夏草に寄生されていた。自らが成長する度に身体の中から冬虫夏草の菌糸が張り巡らされていく音を聴く。モズはその音が好きなのだ。自らは蝉となり夏の降り注ぐ太陽の下で歌を歌うことはできないと悟り、その冬虫夏草を愛する。

幼形成熟

ふと筆が止る。自らを死に至らしめるこの冬虫夏草をどうやったらモズは愛せるのか、と考えた。しかし、どう考えてもモズが冬虫夏草を愛する理由が見当たらない。冬虫夏草を身に宿し、蝉になれず、歌も歌えず、空へも羽ばたけず、太陽の光を知らない。その悲しみに包まれたまま死なれては作者の私としては困るのだ。だが、私はどうしてもモズに冬虫夏草を愛してもらわなければならないのだ。

ノートパソコンを睨みながらそのことを考え、また別の思考が頭をよぎった。「筆がとまる」という言葉が面白く感じる。通常、こうやってキーボードを打ち、文字を書くのが主流だし、脳で思考した文を電脳が再構成し澱みの無い文章を書く技術もある時代に、もう絶滅した文房具の筆という単語を使い、文章が書けなくなることを「筆が止る」という。結局、人は筆の段階で進化を止めているのかもしれない。

私は立ち上がり玄関の郵便受けに新聞を取りに行く。新聞を開くと何百光年へと人類の新天地を目指し旅立った船が三世代かけて地球と変わらない環境の惑星を見つけ、百億の人類を受け入れるべく開拓しているという記事が一面に大きく報道されていた。

ほら、もうこんな時代なのだ。けれど我々はまだ「筆が止まる」という言葉を使っている。我々が進化をするのはまだ先の話だ。けれど科学技術は日進月歩に先行していく。我々はそれ従って文明を発展させてゆく。

以前、読んだ本にこんな話があった。人類は猿の幼形成熟（ネオニティー）だという話だ。確かに人類は猿の幼児に似て体毛も少なく、樹に登る筋力も

ない。ただ猿の幼児のように好奇心旺盛で知識を吸収し頭脳ばかりを肥大させてゆく。つまりこの文明を作ったのは進化を止めてしまった猿の幼形成熟（ネオニティー）なのだ。樹を登る筋力を失った幼形成熟は太陽系外へ行く頭脳を得た。

そんな幼形成熟の猿たちを百億人も三世代もかけて宇宙を旅させれば大きな問題が起るのは目に見えているような気もする。新天地へは光の速さを超える技術で新天地へ向かわせなければならない。少人数ではすでに可能だが、億単位の人を移動させることはできるのだろうか、と新聞に食い入るように読むと「技術的には可能。エネルギーを多く使う星間航法にはおそらく木星資源が使われる可能性が高い」と専門家の意見が懇切丁寧に述べられていた。文明も科学技術もさらに進む。けれど人は幼いままでいいのかもしれない。その幼さが科学を発展させているのだろうか。きっと百年先の人類の物書きもここと違った太陽の下で「筆が止る」と言うのかもしれない。いや、むしろそうであって欲しいと思う。人類は成長せず常に幼く若くあるべきなのかもしれない。

○

新聞を畳むと外へ出た。
早朝の濃霧は嘘のように晴れ渡り、白鷺の立ち迷っていた水溜りに太陽の光が煌いていた。家の脇に着けてある車に乗り町へと走らせる。車窓からは電柱がどこまでも均一に続く舗装道路とこの月の大地に百年以上かけて大気をもたらしてくれた空気草（エアプラント）たちが生い茂る広い草原が見える。この草々たちも地球化の維持管理が外されれば生きていけない環境になるのだろう。けれどそんなことなどお構い

なしに太陽の光を受け、更なる大気を作るべく青く萌え、呼吸をしていた。その真っ直ぐな生命力を見ているともしかしたらこの月の地球化の維持管理を全て外されたとしてもまだ彼らは生き残るのではないのか、と思ってしまう。そんな逞しい青さが眩しく羨ましい。

私が町へ着く頃には太陽は中天へと差し掛かり、真夏の光を容赦なく照り付けていた。

タオル生地の手巾（ハンカチ）をポケットから取り出し額の汗を拭いつつ一軒の店へと入った。

購入するものは決まっていた。私の足腰が立たなくなった時用の車椅子だ。できれば全自動式で性能のよいものであればあるだけよい。そして座り心地を最優先に考えていた。もしそこで死んでもいいようにゆったりと座っているうちにすとんと眠りに落ちれるような揺り篭を感じさせるようなものがいい。

寂れ年老いた町に唯一活気のある介護用品専門店に入ると私よりやや年の若いと思われる額の秀でた店員が現れ、私に「いらっっしゃいませ」と笑顔で挨拶をしてきた。私は「車椅子が見たいのだが」と言うと「今はご存知の通り地球との交易も少なくなってきておりまして品数も少ないですが」と断った上で数点の全自動式の車椅子を店の奥から出してきた。しかし、そのどれもが私の満足できるものではなかった。全自動式なのはいいが性能は限られていて車に乗る際苦労しそうだったり、階段の昇降もできないものもあった。座り心地に置いて満足できるものはあったが、性能は低くただ平面を走るだけというものだった。

そのことを店員に言うと「用件が多すぎます。そんな高性能のものは地球に行かなければなりません。通販で地球から取り寄せるという手段もありますが、かなりのお金がかかりますし」と私の用件に親身になって悩んでいるようだった。

「ここの者のほとんどはあと数年で地球に帰ろうとしていると聞く。そしてここに最後まで残る人はすでに用意はできているらしいな。私はどうやら乗り遅れたようだ」と私は通帳に記載された金額を思い出しながら地球から通販で車椅子を買おうと頭の中で算盤(そろばん)を弾いた。

その時、ぽんと店員は手を叩いた。

「やや欠陥品ですが中古のアンドロイドはどうでしょう。今ある車椅子とアンドロイドなら地球から取り寄せるより低価格になります。それに一人暮らしでは何かと家事も大変でしょうからアンドロイドなら、その辺もカバーできますし」

夕子

私は店員の話を聞き頷いた。確かに身体が動かなくなった時にそういった介護人がいれば楽かもしれない。値段も思っていたよりも高くないらしい。

「ただどういう欠陥があるのか知りたいんだが」

「まず笑わないのです。前の主人が亡くなった時からどういうわけか一切笑顔を作れなくなりました。他にも少々不具合があるかもしれません。ご存知の通りその手の専門家ももうこの月にはいません。詳しく調べることができないのです。けれど型は古いですが大東亜工業製のアンドロイドですし、よく使い込まれていますから動きも会話も滑らかですよ」

「ちょっと待っていてください」と店員は一言言うと店の奥へ行った。私はしばらく店内を歩き、他に欲しかった物を買い物籠へ入れた。点滴用のチューブと針、消毒液、もうすぐ使うことになるであろうカテーテル、おむつ。

ふと外を見ると真夏の太陽の下、ほとんどの店のシャッターが下りていた。そんなアーケード街を人がまばらに歩いている。そのどれもが年老い、たまに見かける若者もどこか気だるげに歩いていた。真夏の日差しがそうさせるか、それとも全てが終わりつつあるこの星のせいなのか、皆、足元に纏わり点く様な黒い影を落としている。その中、一人の婆さんが瀟洒な白い日傘を差しベンチに腰掛け、バスを待っていた。目を瞑り、ゆっくりと小刻みに頭を揺らしながらリズムを取っている。きっと鼻唄を歌っているに違いない。歌っている歌はおそらく地球の歌だろう。

「おまたせいたしました」

そう言って店員が奥から戻ってきた。最初、女性の店員と一緒に来

たかと思ったがよくよく見ればその女性の店員がアンドロイドらしい。無表情にこちらを見てお辞儀をした。そのお辞儀は定規で測ったような丁寧なものではなく、ましてや人のそれでもない。それらの丁度真ん中に位置するお辞儀だった。そしてその顔は地球でよく見られる本物と見紛うくらいの滑らかな人工皮膚でなく、皮膚に似せた人工的な素材でぬくもりを感じさせず、どこか無機的な冷たさと色を放っていた。顔の造形も三世代ほど前のニュアンスだ。「完全な人の模倣を造る技術がないのなら、せめて今ある技術で美しいと思えるものを造ろう」そんな製作者の意図を感じる。

「少し歩かせてみましょうか」と店員はアンドロイドを歩かせた。確かに滑らかな動きだった。よく見ればそれはアンドロイドだと分かるが、仮にこれが地球の繁華街だとしたら誰もこれがアンドロイドだとは気付かないだろう。次に店員はアンドロイドにお茶を淹れさせた。夏に茶もないだろうと思った。店員は私の顔から心情を察したのか「身体に良いのです。自分も飲んでいますし、お茶を淹れるというのは繊細で複雑な所作ですので」と言った。

私は店員に案内され店内の接客用の卓上（テーブル）へ行き椅子に腰掛ける。しばらくするとアンドロイドは急須（きゅうす）と湯のみを持ってきた。人と違い一切の震えがない手で急須を持ちお茶を淹れる。少し不自然な感じがするがその一連の動作が洗練されており違和感を感じない。

ふとその時のアンドロイドの顔が目に入った。

無表情でお茶を淹れる顔が伏せ目がちになってる。そのぬくもりのない冷たい眉目には、そこはかない頼りない気持ちがどこまでも沈んでいるようだった。

「君はいくつになるのか」

私は思わずアンドロイドに聞いていた。

「寿永三年一月二十三日に製作されました」まっすぐこちらを見て言った。

そしてやや視線を外し、お茶の入った湯のみを私の手元にやり「九

十三歳になります」と答えた。

私はこのアンドロイドを購入することに決めた。
彼女を見ると地球から月に来る時、シャトルから見た日本海へと沈む夕日を思い出す。夕日が赤く沈みながら光り、周りは紫色にたなびく雲がある景色だ。それは心の中にある喪失感と直結していた。
私は彼女に「夕子」という名前をつけた。

モズ

蛙は晴れ渡った空に悲哀を感じさせる曇天の気配を感じると、ふいにかいかい、と鳴いた。この声はたった一つの意味を持っている。「私はここにいます。貴女に会いたい」ただその一言だった。けれどその声の意味するところより、むしろ彼らは己の声に聞き惚れることがしばしばあった。しかも己と友輩の声をごっちゃにして聞き惚れた。隣に濡れた新緑ような肌を持つ女が通ったとしても、その歌声を止めることなく友輩と共に歌を楽しむ暢気な善良さを持ち合わせていた。

モズは地中の中でその声を聴き澄ませ、彼らの柔らかな手足が水にふわりと浮き、喉を動かせ超然と歌う声がその青い背の遥か彼方の遊雲に消える様を思い浮かべた。ふいに雨脚が強くなるとその声はいっそう濡れた美しい歌声として響いた。その彼らの歌声にモズは未来の自己の姿を写し胸躍る期待感を感じた。

その雨は夜間降り続き夜が明ける頃にようやくあがった。蛙の歌声も朝日が昇り晴天の気配を察して、次第に消た。どこか肌の乾かぬ水辺のねぐらに戻り惰眠を貪るのだろう。モズも想像の彼らの姿と自らを重ね合わせ、そっと目蓋を閉じた。その目蓋の裏の暗闇の中、身体の奥の方で何かが芽吹く音を聴いた。

○

私が執筆していると夕子が横から珈琲を差し入れた。私の執筆の邪魔にならない角度を考え、かつ珈琲が欲しい時を察してそっと置く。

その気配りはとても機械の行為とは思えなかった。仮に珈琲が傍に置かれる時に彼女の関節から細やかな歯車の音が聴こえなかったらそれは人の行為とさして変わらなかった。そして新しいアンドロイドのように常時、人の傍らにいて指示を待つのではなく、常に小間使いとして私と一定の距離を保って家事や掃除をしていた。

珈琲が置かれると私は老眼鏡を外し、疲れた目を閉じた後、外を見た。窓からは空気草の草原が海からの風に青くそよいでいるのが見えた。

「ご主人、今日はいい天気です。車を洗ってもいいでしょうか」と夕子が私に言ってきた。

そういえば車を長く洗ってない。私は「洗ってくれ」と承諾した。だが夕子は「分かりました」と言ったはいいが、すぐに外には出ずに私の向かいに座った。

「少しお話をしてもよろしいでしょうか」

「いいよ」

全ての動作が本物の人であるかの動きだが、そこには人でないものが存在した。最初、それに違和感を持ったが慣れてくると、造形美的な容姿も動きも気楽に会話をするための機微が含まれていることに驚いた。製作者の意図と長く人と付き合った人工知能の合わさったせいだろうか。

「あの車はいい車です。よい選択をしたと思います」

「君と同じ大東亜工業製だからか」

「そうです。自社製品ですし、私もあの車ももはや製造されていない古い型ですので、何か親近感のようなものを感じます。どうしてあの車をお選びになったのか聞かせてくれませんか」

「ただ燃費がよく走りがいい。銀色は少々の汚れは目立たない。そして車内が広めに設計されているのが気に入った。それだけだ」

「十分です。それが私たちの本来の選び方だと思います。よい買い物をなされました」

私たち、その言葉が私には違和感を感じさせた。車と彼女とは私にとって同一線上にないものだったからだ。しかし彼女は同じものだと思っている。こんなにも人に近い自らをただの機械だと、卑下でもなく実際にそう思っているのだ。無表情に語るその姿と感情を持たない声が何か悲哀のようなものを感じた。

「では」と椅子から立ちあがろうとした彼女に私は「待て、もう少し話をしよう」と呼び止めた。

「君は笑顔が作れないという欠陥があるそうだが。それはいつからだ」

「笑顔が作れないだけではありません。店員から何も聞いてないのですか。今ならまだ返品もできます」

「少々の欠陥があるかもしれないと聞いている」

「あるかも、ではなく、あるのです。確かにさして重要な欠陥ではないかもしれません。ですが私を使用なさる方なら絶対に耳に入れておくべきです。今からお話しますからよく聞いてそれから返品するかこのまま使用するか決めてください」

紅茶

「私が故障したのは貴方の前の主人のお世話をさせていただいている時のことです。その方はお年を召した女性でした。若い頃、火星で歌手をしていました。たいした歌は歌っていない、と自ら言ってましたが、火星で一世を風靡した方です。名を言えば分かるかもしれません。けれど亡くなった彼女のことを思うとそれは言わない方がいいと思われますので、ここでは言いません。

彼女はよくアルバムを開いて私に彼女自身の昔話をしてくれました。その分厚いアルバムはまるで図書館の奥にある一般人は決して手にしない専門書を私に連想させました。多くの著名人と一緒に写った写真と三回ほど結婚と離婚を繰り返したらしく、その三回分の家族との写真がありました。きっと若い頃は素敵な歌手で多くの人をその歌声で魅了させ、その名声と富が彼女にとって幸福と不幸を人の何倍ももたらしたのではないか、と思わせました。そんな経験からか常に人を寄せ付けない独自の雰囲気を身に纏(まと)っていました。別に不快なものを感じさせるとか、言動が不適切だとかではないのです。普通とは違うのです。それはねじれに似た雰囲気でした。多くの経験が彼女の内面を修復不能にまでさせたのかもしれません。そのせいで人は彼女に近づこうとしません。もっとも彼女自身も人というものを好んでいながら、人に不快な思いをさせないよう自ら人を避けているようでした。五十三歳の頃、この月に独りで移住してきてから、とある月資源会社の社長が使っていた私を中古品ということで格安で購入しました。私を購入した後、私の仕事、所作、言動について多く指導をしてくれました。今の私の全ては彼女から学んだ、と言っても過言ではありません。

彼女は常に一人でした。あれだけ彼女のアルバムの中に人がいまし

たが、そのどなたもこの月に訪ねてきません。彼女の人生はそのアルバム中で全て終わっており、この月で独りで暮らしている生活は彼女の人生の余りでした。想い出の中で生き、その想い出の外で生活することを苦痛に思っているようでした。私はその苦痛を和らげるお手伝いをさせていただきました。彼女の話を聞き、歌を聴き、時には彼女から歌を教えていただきました。しかし、和らげることができても彼女の苦痛は完全に癒されることはないのです。そして彼女の一番の不幸は長生きしたことです。百十歳まで生きました。想い出の中で人生は終わっていたような人がその想い出より長く生きたのです。

彼女は私にいつも朝の目覚めに紅茶をベッドまで運ばせました。その習慣は一日たりとも欠かさず五十七年と十ヶ月行われました。彼女は寝ている時に老衰からくる心不全で亡くなっていたのです。しかし私は彼女が死んだことを理解できず、朝、決まって彼女に紅茶を出していました。そして一日中、彼女の脇で目覚めるのを待ち、また朝になると紅茶を卓上（テーブル）に置いていました。寝覚めない彼女に彼女から習った歌を歌ったときもありました。今にしてみれば理解できません。私の眼の前で動かず、物言わず、ただ腐っていく彼女を見ながら私は彼女がいつか目を覚ますものだと思っていたのです。

そんな壊れた私と亡くなった彼女を投資の話に来た銀行員が発見してくれました。彼女はお金は多く持っていましたので。その後はまるで訪ねてこなかった三人の元夫や彼女の子どもたちが次々訪ねてきて、彼女の遺産に関して言い争っていました。彼女は遺書は書いていませんでした。かなり揉めたと思います。その後あの家がどうなったのか分かりません。私はあの店へ売り払われてしまいましたので。

つまりご主人、私は貴方が亡くなったとしてもそれに気付かないかと思われます。それが私の欠陥のです。不都合でしたら返品される

のをおすすめいたします」

無形の遺言

夕子が話している時、ふと私から視線を外し、窓の外を眺めることがあった。それは長くカメラのレンズのような無機的な視線を受けることを苦手な人がいることを知ってのことだろうか。それとも欠陥品である自らを恥じているからだろうか。そこに私はある種の思慮を感じた。その思慮は機械の持つものではなく温もりすら感じた。この温もりを与えたのはおそらく前の主人だろう。私は私の前の主人に軽い嫉妬にも似たような感情を覚えた。

「人である私にはこう思える。君は悲しみの余り笑顔が作れなくなったのではないかと」

「いいえ。それはありません。九十三年間、稼動してきて、いまだ悲しみというものがどういうものなのか理解できません。彼女の死を認識できなかったのはおそらくそういう欠陥を抱えているからでしょう。これは改善されていません。月に大東亜工業のアンドロイドの整備工場はありませんし、専門家もいません。そして私は相当古い型です。修復は永遠に無理かもしれません。

そもそも笑顔に関してはまた別なことなのです。ただ単に前の主人が笑顔というものが嫌いな方でした。特に作られた笑顔を嫌っていたのです。いえ。嫌っていた、というより憎んでいたのかもしれません。私に自然な笑顔を作るように、と始終指導されましたが、結局、私に自然な笑顔を作ることはできなかったのです。ですから彼女と暮らしている間、私は笑顔を作りませんでした。そのせいか笑顔を作るということを忘れてしまったのです。その事と人の死を認識できない事に何か因果関係があるかもしれません。しかし、本当の事は分かりません。ただそういう欠陥を抱えた商品であることを知っていただいた上で使用していただきたいのです。そしてこの欠陥がお気に入りにならないようならば返品してください。今ならまだ返品はできるはずです」

「君の持っている欠陥とは、笑顔が作れず、人の死を認識できないということか」私は呟いた。「そうです。笑顔が作れず、人の死を認識できないのです」夕子はそれに続き同じことを言った。まるで大事な暗号を確認するように。

「さして問題はない。君を返品する必要性を感じない。そもそも私が死んだ後はどうにでもしてくれればいい。紅茶を運んでも構わないし、枕元で歌を歌ってもらっても一向に構わない。ただ私の方が腐敗して面倒をかけるかもしれないが」

私の言葉に彼女は無表情で頷いた。

「ありがとうございます。ご主人。では改めまして、これからよろしくお願いします」

そう言って立ち上がろうとしたが、何かに気が付いたのか、また椅子に座りなおした。

「もう一つ言い忘れてたことがあります。私はその欠陥を欠陥として認識していません。ですから自己修復機能も作動しないのかもしれないのです」

「私にもそれらの欠陥は欠陥に思えない。それはそれでいいと思える。見てくれこの珈琲カップの薔薇を。これはまだ私が文筆家として駆け出しの頃買ったものだ。しかも中古でな。もう五十年くらい使っているかもしれない。でもこの珈琲カップを捨てようとは思わない。見ろ、このくすんだ薔薇を。薔薇の花を五十年も埋もれさせていたら、あるいはこういう色になるのかもしれない。この風味は歳月をかけないとでないものだ。君はこの薔薇に似ている」

夕子は少しの間黙ったまま止ってしまった。その間、私は彼女がアンドロイドを止め、精巧な人形になったかと思うくらい微動だにしなかった。そして短い沈黙の後、こう言った。

「薔薇の花を地中に埋めると腐るのではないでしょうか」

「君はやはり機械なんだな」

彼女にどんな返事を期待していたのいうのか。私は笑った。月に来て以来、始めて笑ったかもしれない。

○

私はぬるくなり苦味が増し酸味がとんだ珈琲を飲みながら夕子の前の主人のことを考えた。彼女は元歌手で富と名声を手に入れていたらしい。そしてそのことにより不幸も味わった。私とはまったく違う境遇ではある。だがこの地で全てを終えようとしていたのだけは確かだ。どうしてこの地だったのか。火星から遠く遥か離れたこの地で人生を終えるのはどういう気分なのだろう。人は老境に入ると自らが長く住んだところから離れたがらない、という。けれど彼女は離れた。長く住んだ場所がなかったのか。いや、彼女が住んだ全ての場所は苦い想いでだけで満たされていたのかもしれない。それから逃げるようにしてこの地へ来たのではないだろうか。そして夕子に会い、自らのアルバムを開き夕子に写真を見せ、自らの過去の想い出を語る日々。けれどその想い出は煌びやかで美しい想い出でもあるが、同時に暗く苦い想い出とも繋がっていたはずだ。それらを振り返る日々はどのようなものであったか。遠くこの地の果てのような月にまで逃げて来たはずなのに。夕子にそれを語る時、彼女は何を思ったのだろう。自らの心の内部ねじれさせてしまった過去は遠景として見るならば好悪を超えて美しい光の一つとして眺めることができたのだろうか。遠く赤く輝く火星をこの地から見上げるように。

夕子の元主人に対しての勝手な推論だ。彼女が何を思っていたのか、勝手に推論することは亡くなった彼女に対しての冒涜にも思える。しかし夕子が語った彼女の月での人生は何か自分の中に響くものがあった。夕子から彼女のことを聞けるだけ聞こう。夕子が個人情報をどれだけ伝えてくれるのか分からないが。

ノートパソコンに向かう。
やはりモズは最終的に冬虫夏草を愛するに決まっているのだ。

私は地球にいた最後の日を思う。長く住んだ我が家から全てのものを運び出した。家具も電化製品も写真も何もかも全てを売り払うか、捨てるか、月へと送った。ただ居間にある散乱した花束と落ちた花瓶だけは手をつけられなかった。畳は花瓶からこぼれた水のせいで変色している。それを私は拭く事もでいない。なぜならそれは私の妻が生きていたときに最後に触れたものだから。これが我が家からなくなるときっと妻は完全に消えてしまうのだ。そんな妄想を抱いていた。
家は借家として売り出し、今はあの家は私の知らない誰に使ってもらっている。きっとあの花束も花瓶もすでに片付けられたことだろう。しかし、私の記憶の中であの家の居間にはいまだ花束と花瓶がそこにあり、畳はこぼれた水で変色したままなのだ。

夕子が来てから部屋は丁寧にかつ効率よく片付けられていった。そもそもこの家にあるものは私の生活に必要最小限な物ばかりで、そんなに散らかっているというものではなかったが、そこはやはり専門家（スペシャリスト）。しかもアンドロイドともなれば普通の人の目とは違うものを持っているらしい。私の所有している物は彼女のイメージする本来あるべき場所に移動され、見易いように分類され、かつすぐに手が届き、片付け易い所に配置さた。家具も私の好みを聞きながら動かされ、日当たり、風向きを考え、素早く結論を出す。その行動は小間使いのそれより洗練され、軍隊の特殊部隊の動きに近かったかもしれない。彼女は考える時、少しの間立ち止まり、顔を斜め下に床を見て、その細い顎に右手の親指と人差し指を軽くはさみ、軽く握る。そして右手の肘を左手が軽く支え身体の内側に少し寄せた。その姿勢は考えるという動作というよりも駅の大きな広告で見かける女性向けのファッション広告のモデルを思わせた。

「それは前の主人の指導か」と私は彼女が全ての仕事を終えると冗談交じりに言った。

夕子は「そうです」と文字通り機械的に頷いた。

その機械的な生真面目さと、前の主人と夕子とのやり取りを想像すると微笑ましい。それはまるで母と娘の姿を私に連想させた。様々な人生を歩み月へと来た前の主人を思うと、幾分寂しさを感じさせる。微笑ましさはその寂しさとあいまって清涼感にも似た感覚を私に与えた。

「前の主人はどんな人だったのか教えてくれないか」思わず出た私の言葉に「それはできません」と夕子は即答した。

「個人情報はお伝えする事はできませんので」

「しかし君の欠陥の事を話したとき前の主人に関して話していたではないか」

「私の欠陥の説明をする際にどうしても前の主人の話を交えなければならなかったので仕方なく話ました。けれどそれは嘘を交えています。三回の結婚と離婚を繰り返したと言いましたが、もしかしたら四回かもしれないし、一回かもしれない。そもそも結婚してなかったかもしれない。そして歌を歌っていたのは火星かもしれないし、エウロパかもしれないし、地球のレニングラードかもしれないし、ウズベキスタンかもしれない。もしかしたらブエノスアイレスかもしれない」

「でも歌手というのは嘘ではないのだな」

「そうです。それは個人情報ですが確かにお伝えしなければなりません」

「何故」

「私は前の主人から歌を習い、その歌を歌ってもいいと言われました。そして歌手だったこと言ってもいい、と」

「その歌から個人が割り出されるのではないのか」

「いいえ、月に着てから作った彼女が個人的に作った歌です。個人は割り出されることはないでしょう」

「そうか」私は椅子に座った。整理と掃除で疲れていた。

私が言葉を切ると夕子は台所へと向かう。彼女は私が何もいわなくても私が飲みたいものを知っていた。ふと窓を見ると輝かしい日差しが窓の脇にある大気樹の葉を緑というより黒に近いくらいの色に照らしていた。外は猛暑で空調が利いているこの部屋からは一歩も出たくないくらいだった。

その風景を見ながら頭の中で今は亡き夕子の主人のことを思った。アンドロイドは個人情報は一切言えない。けれど前の主人は夕子に歌を教え、自らが歌手であったことを教えても構わないと承諾した。歌手であったことと、月で作った歌を夕子に残し、その他の詳細な情報を消し去った。自らを寂しさと幾分の優しさの残り香を漂わせて。

ほどなく夕子が台所から冷たい珈琲を持って来た。

「では歌は歌ってくれるか。前の主人が作ったという歌を聴きたい」
「それはいいですよ。待っていてください」
やや、伏せ眼がちに、立ったまま押し黙った。電脳の中の歌の情報を探しているのだろう。
珈琲を飲みながらしばらく待つとハミングが夕子の口からこぼれ、次第に歌声となり部屋に響いた。
歌詞は日本語でも英語でもフランス語でもロシア語でもなかった。もしかしたらスウェーデン語かもしれないしラドビア語かもしれない。ようは私の耳に馴染みのない言葉で歌われていた。歌詞の意味するところはまったく分からない。しかし一つ確かなことがあった。この歌は私の心に響いた。それは夏の薄月の夜に薫るように木々をへだてかすかに聞こえる歌のように、もしくは冬の木枯らしに研がれて尚、優しい姿を失わないつばきの蕾のように、私の心の琴線に触れた。
私は思った。
もしかしたら彼女は死後、歌そのものになりたかったのかもしれない。

光と影のほとり

日差しが弱くなる頃、夕子を連れて夕涼みに外へ出た。
海辺を歩きながら、打ち捨てられた斜長石採掘場の赤茶けた風力発電の風車を横目に永久影を目指す。思えば生まれてこの方、夏というものは早く過ぎれば良い、といつも願って生きてきたように感じる。しかし、夏が過ぎるとそれはそれで寂しくなるものというのも同時に感じてきた。この夏も幾年か過ぎ去った夏と同じで、終わることを願いつつ、終わることへの寂しさを感じていた。
永久影まで行くとくっきりと日の当たるところと、そうでないところで分かれている。月の創成期から続く永遠に日の当たらない場所、つまり月の裏側だ。暑い昼には暑い風が永久影へと吸い込まれ、涼しくなってくると逆に冷たい風が日の当たる場所へ流れていった。
その影と光のほとりには空気草が生えていた。空気草は日の当たる場所では背が高くなり、逆に永久影に向かって低くなっている。そしてその奥の方ではまるで何も生えない岩場が続くばかりであった。それは地球上のどんな深海よりも無機的で腐敗すら超えた圧倒的な死のにおいが漂ってくるようだった。その光と影のほとりを歩くと人の生死も同じようなものだと気付かされる。壁一枚隔てたところに常に死は横たわっているのだ。いや壁というよりこの足元にある境界線のようなものかもしれない。これだけ近いのに一度でも死の領域へ入るともう姿が見えなくなってしまう。声も届かない。残った記憶も霞んでゆく。ふと居間に転がった花束と花瓶を思い出す。あれはどういう名の花だったか。どんな色の花だったのか。もう思い出すことができない。全ては色褪せ、消えてゆく。
「お話をしましょう」
共に歩いていた夕子が話しかけてきた。
「どんな話がいい」
私は影と光の境界線を踏みながら答えた。

「できれば明るい話がいいです。昔の心に残っている良い想い出とか」
「想い出というのは良いも悪いもないよ。良い事も悪い事も全て繋がっている。今思い出すことと言ったら妻のことだ。あれには若い頃迷惑をかけた。私はこれでも文筆家でそこそこの地位を得ていた。文筆家と言っても、どちらかと言えば売文家だ。どう書けばそれが売れるかだけ考え、その道に精通していた。名声もあり、金も幾許かあり、少々天狗になっていたかもしれない。
妻とは恋愛感情で結婚したはずなんだが、天狗になっていた私はいつの間にか私は女を作って遊んでいた。馬鹿だろ。妻には決してバレないと思っていた。それどころかバレるか、バレないかという状況を楽しんでいたかもしれない」
ふと妻の顔が脳裏をよぎった。それと名も顔も思い出すことのできない恋人がこちらを見て泣いていた。妻は言った。私たちの間に子どもできていれば、こうこともなかったのではないですか、と。見当違いの話だった。ただ私が間違っていただけだ。自分というものの価値が限りなく高く、全ては許されるか、都合の悪い事は時間をかければ何事もなく消え失せると思っていただけだ。妻は私だけを責めればいいのに自分自身も責めていた。
「妻には迷惑をかけた。全てはお見通しだったのだ。それは尾を引いた。若気の至りで済まされることではない。そのことで私たちは決定的に損なわれてしまった。私と妻の間には埋まることのない亀裂ができた。お互いを思う特別な感情は常にあったのにその亀裂がお互いを阻んでいた」
「奥様とは離婚されたのですか」
「いや、離婚はしなかった。三年前に死んだ」
「お悔やみ申し上げます」
お悔やみ申し上げます。その言葉に腹が立った。悔やんでも悔やみきれないのは当たり前のことだ。私は妻の人生の上で汚点でしかない。それどころか病気で苦しむ妻に何もしてやれなかった。ただ傍

らでひっそりと死ぬ時を待っていたようなものだ。そもそもあの時、妻が離婚を口にすれば私はそれに従っただろう。結局妻はそれは口にしなかった。昔は何を考え、何をしたら喜ぶのか分かっていた。些細なことも全て共に分ち合うことできた。それなのに一番近くにいるばずなのに何を考えているのかまるで分からなくなってしまった。この機械が私の過去を再び思い出させた。あの時の怒りが胸の内に湧き上がり私は踵を返して早足に帰り道を歩き始めた。

「すみません」

私が怒ったことに気が付いた夕子が言った。その後におそらく何か気に障ることでも言ったのでしょうか、という言葉が続くはずだったのだろう。しかしこの賢い機械はその言葉を飲み込んだ。

私は怒りに任せて歩いた。永久影から吹く冷涼な風を背に受け、眼の前に赤茶けた風車越しに夕焼けに染まった海を見た。そしてその海と空との間に地球がぽっかりと浮かんでいた。

この胸の内の怒り、それは誰に向けての怒りか。私自身に対しての怒りではなかったのか。私は立ち止まり夕子に言った。

「夕子、少し想い出話をしよう」

夕子は私から視線を外し、眉目を垂れ悔いている表情を作った。

「昔、少年時代に晶（あきら）という男の子のような名を持った少女がいた。まだ十四、五の頃か。いやもう少し下だったかもしれない。スカートを穿いているのを見たことがなく活発な子だった。浅黒く元気に走り回っているのが常だった。なんとなく彼女を見るたびに私の心ははそわそわしたものだ。その子には兄がいた。もの静かで年の頃のわりに酷く落ち着いた美少年だった。そして晶の下にはもう一人いた。これは綺麗な顔立ちと言えず、酷く自尊心が強く、上の兄と姉を軽んじているようだった。そして兄と姉はどこかその妹を遠ざけていた、と言えばその子らの家庭環境は大体見当がつくだろう。夏休みの頃だ。家の裏の石垣でできた用水に私は蛍を採りによくそこにいた。用水であるから流れは早い。そんな中、ゆっくり飛び交う蛍の光が点々と舞う姿は非常に美しいものだった。私は虫取り網

を持って蛍を二、三匹採り部屋に放って眺めようとしていた。そこへ後ろから晶が現れた。物も言わず、ただ目の辺りを赤く晴らし、口をへの字に歪ませて立っていた。普段、心をそわつかせながらも一切話したことのない彼女に私はどう言っていいのか分からずただ一言、蛍を採ってあげよう、とだけ言った。それに対し、晶は震えた声で、ありがとう、と返事したのだ。今でも彼女のその声が私の耳に残っている。

何がどうということはない。ただの想い出話だ」

辺りに夜闇が迫ってきていた。まるで永久影から影が這い出してきているようにも感じられた。

夕子は一言「ありがとうございます」と言った。

胸につかえた怒りは常に悔いへと変わる。思えば私の半生はいつもその繰り返しだった。

冬虫夏草

身体の中でから聴こえる音は日増しに大きくなっていった。モズにはそれが何なのか分からなかった。時にそれは歌に聴こえ、モズは自らが飛び立つ日へと思いを馳せた。身体の中に歌が埋もれているのだ。きっと私は空へ飛び立ち、きっと歌を歌う。きっと空で歌そのものになるのだ。ほら、こんなにも身体の中に歌が溢れている。モズはうっとりとその胸に手を当て目を瞑る。鼓動に合わせて、まるで血と身体中の管や筋を楽器にぷちぷちと音が溢れていた。ふいに違和感を感じ胸を見やると胸骨と胸骨の間の皮膚を破り白い芽が顔を覗かせていた。

筆が止った。それが歌ではなく冬虫夏草だと知ったとき、彼は何を思うのだろう。暗い地中から出れず、歌を歌えず、冬虫夏草に自らの身体を栄養として搾取されていくと知ったとき何を感じるのだろう。恐怖だろうか。悲しみだろうか。あるいは絶望だろうか。けれど彼は冬虫夏草を愛さなくてはいけない。

○

笑顔が作れない、と言ったのを思い出す。確かに夕子は笑顔が作れなかった。それは永年、笑顔を作らずにいたせいだと言っていた。いや、もしかしたら他の欠陥と何らかの因果関係があるかもしれない、とも言っていたと思う。始めてそれを聞いた時、どうと言う事のない欠陥と思った。欠陥ですらない。些細な、まるで借家の壁にあった染みのようなものだと。それは些細な失敗で汚してしまって、もうどうしても取れない染みだった。しかし気にしなければ生活す

るうえでは何ら支障のないものだと思った。それどころか味のあるものだとすら思い、ただの一風景として見逃していた。確かに生活する上ではその染みは何ら影響がない。しかし時を経て人の心理は一定ではない。壁の染みは時として不吉な兆候に見えることがあるように、夕子の表情も時として不吉なものに見えた。

笑顔が作れない。それは無表情に近く、そしてそれは私を責めているように写る。原因は分かっている。そして彼女は何ら私を責めてはいない。

しばらくノートパソコンの前で黙って目を瞑り自らの思考の中へ埋没した。そこには若いモズが地中で飴色の胸から這い出た青白く光る芽を不思議そうに見ている。あるいは居間に落ちている花束と花瓶、その脇で倒れている妻。月。地球。ビー玉。瀟洒な白い日傘を持ってベンチに座って地球の歌を歌っている老婆。あれはいつ見た光景だったか。ふと気付くと私の口の中にできものがあるのを知った。舌でそれを確認するとそれは僅かに熱を帯びていた。一つの兆候だ。想像の中の借家の壁についている染みのようなものかもしれない。悪いか悪くないか、聞かれたら大方の人は悪いというに違いない。けれど私にとっては願っていた兆候だった。不吉かもしれないが、その不吉さを願っていたのだ。少し気分が軽くなった。

目を瞑っている目蓋の暗闇の右の方からかすかな歯車の音が聞こえ、珈琲の匂いが漂ってきた。

「どうぞ」という夕子の声。その声も感情というものがあまりこもっていない。ある程度はあるように感じるが、そのある程度が私を責めているように感じた。私がそう感じるだけなのは分かっている。なぜなら機械は私を責めたりしない。しかし、この口調はどこか懐かしさを持って私の心に響く。そしてこの口調を和ませる方法を私は知っていた。

「なあ」何気ない言葉を発した。何気なく普段通りに話す。
責めていると感じるのは幻想だ。懐かしい口調が私に幻想を抱かせる。私は目を瞑ったままその幻想に向かって普段通りに話していた。幻想の正体は妻だ。まだ私たちの関係が損なわれる前、よくこんな口調で妻は私を責めた。同じように私も妻を責めたこともあったかもしれない。
「冬虫夏草を知っているか」
何気なく話し、雰囲気のコリをほぐす。ほぐれたら簡単だ。原因を聞けばいい。お互いのことを話し合えば大抵のことは解決したし、胸につかえた問題は常にたいした問題ではなかった。あの関係を思い出す。
「どうぞ」
続いて夕子が私の右手に手巾(ハンカチ)を渡した。なぜ手巾を私に渡すかわからず、彼女の顔を見ようとした。しかし景色は滲み何も見れなかった。私は亡き妻を思い出し、知らず知らずのうちに目に涙が溢れていた。
「すまない」私は手巾を夕子に戻し礼を言った。
「もう一度、最初、何を言ったのか教えてください。私の知っていることなら何でもお答えします」
何気なく話した。本当に何気なく。彼女の表情は私を責めていない。その顔を見て、もしかしたらと思う。そもそも妻は私を責めていなかったのではないか、私たちの損なわれたと思っていた関係は私がそう思っていただけなのでは、と。しかしそれを確かめる術もなく、こう思うことが亡くなってもはや話すこともできなくなった妻に対しての冒涜に思えた。感情が渦となって言葉が出てこない。つかえた胸を抑えるために大きなため息を吐き、外を眺めた。
空気草は夏の日差しを余すところなく受け入れ十分に生長し、今では小さな黄色の花たくさんつけていた。その黄色の花はそよ風になびき蜻蛉が二、三匹風に逆らって飛んでいた。

私はある程度落ち着きを取り戻して言った。
「冬虫夏草を知っているか」
しばらく夕子は考えて「それはどういった花を咲かせるのでしょうか」と言った。
夕子は菌類の冬虫夏草を言葉から考え、草だと思ったのか。
「花か」私は思わぬ拾い物をした気分で再びノートパソコンを開いた。
私はキーボードを走らせ「どういった花を咲かせると思う」私は夕子に聞いた。
「わかりません」
「憶測でいいのだ」
「冬に夏の言葉から寒さと暑さを感じます。どちらの気温にも感じられる色と言ったら、おそらくは白ではないでしょうか」
ふいに居間に落ちている花束にあった一番大きな花の色を思い出した。おそらくは白だ。それは確かに純白の百合だった。

彼は冬虫夏草を愛さなくてはならない。

欠陥品

生活の大半は家事をして過ごした。掃除洗濯をしたと思えば、買い物に出かけた。それを夕子にさせることもあったが大抵のことは自分でやっていた。まだ身体の動くうちは自分でやらなければならないような気がしていたからだ。そのせいで手持ち無沙汰になった夕子が部屋々々を周り、何か仕事がないか探している姿は原始的な電子算譜（プログラム）からなる直情的な機械の動きに見える。それはまるで子どもが親の手伝いをしようと何か自分にできることを探しているようであり微笑ましくもあった。

そして家事の最中には時代遅れのステレオからドビュッシーの月光やブラームス交響曲第四番などが無作為に流れていた。夜は椅子、またはソファに腰掛け、主に日本古典を読んだり、私がまだ若い頃によく観た映画を再び観たりした。人間、年を取ると見たり聞いたりしたことを長く記憶を脳にとどめて置くことができない。これは生活上、不自由だが、本や映画になると話はまた別だ。大抵のことは忘れてしまうので、昔見た本や映画など細部を完全に忘れてしまって、再び見るとまた新しく見たもののような新鮮味を失わないのだ。

その後に執筆に取り掛かる。現役時代から執筆は夜だった。現役時代から比べるとその執筆速度は遅かった。上古の羅馬（ローマ）人が砂利や石材を用いて手作業で長い長い道を作るようにゆっくりと慎重に書いていた。誰に見せるわけでもない。自らのための物語だ。私以外誰も待っていない。急かされる事もなければ、必要とされることもない。時折、筆を止め休憩を取る。その時、夕子がそっと静かに関節の歯車の音を立ながら私の横へ珈琲を置いた。私はそれを飲む。いつもはブラックなのに今日はミルクと砂糖が入れてあった。

こんなことは始めてだったが、その時、私はこのことを夕子の気遣いだと思い、ゆっくりと味わった。

○

翌日の朝、せわしなく窓を小叩く音がするのでカーテンをめくり窓を見ると霰(あられ)が降っていた。窓から見える空気草の草原はもはや枯れ野となり薄茶色の茎が霰に打たれ、静かに地に伏せていた。

秋の終わりに空気草の黄色の花が風に散ってゆく様はそれは美しいものがあった。たまに玄関先の水溜りに小さい花びらなどが浮いている様もまた別な趣があったものだ。しかし、季節が過ぎ行くのは早いものだ。もうあの時の風景は過去のものとなり、今はあの日、見たもは全てが地に伏せていた。空気草の花がつけた種子はこの草原の地表で同じように霰に打たれながらも春の夢を見ながらまどろんでいる。

雲は早くながれ、霰は降ったり止んだりと繰り返しながら、遂には完全にその姿を消し、雲の割れ目から光が差し込んできた。ふいに葉の落ちきった大気樹の根元に一匹の黄色い蝶がいるのに気が付いた。まるで空気草の花を思わせる黄色の羽根で上羽根(うわばね)の上部に黒い紋が現れている。その羽根を広げたり、閉じたりとまるで目をしばたたくように動かしていた。まるで寒さに震えているようにも見えた。季節外れの蝶に何か夢のような光景を見ている気分になった。暫し、目を閉じると少し眠ってしまったのだろうか。目を開けた頃にはもう蝶はどこかに消え去っていた。

戸を叩く音が聞こえた。私は入ってくれ、と言うと夕子が「おはよ

うございます」とお盆を持って現れた。そのお盆の上には私が戸棚に永らくしまっていたティーポットと愛用の珈琲カップが載せられていた。あたりに紅茶のいい香りが漂う。相変わらずの無表情で夕子はティーポットから紅茶を珈琲カップに注いだ。そして「ご主人、どうぞ。……そうそう生憎、茶葉を切らしていまして、即席のものしかありませんでしたけれど」と私に紅茶を勧めた。

私は呆気に取られつつもそれを受け取ると夕子の顔を覗き込んだ。そこにはいつもと変わらない夕子がいた。理知的な黒い瞳も造形的で整った顔もいつもと変わらない。しかしおそらく紅茶は私に出されたものではない。前の主人に対して出しているのだ。夕子は静かに壊れ始めていた。

その感情を表さない白磁の仮面に満たされることのない寂しい色合いが写った。

＞i24953|3265＜

病

夕子の手を引いて車に乗り急いで町へと向かう。車に乗るといきなり雨脚は強くなり、遠く秋雷が聞こえた。私はワイパーが車窓の雨水を切るのを忌々しげに睨んだ。夕子は助手席で黙って座っている。こめかみに右の手の中指と人差し指を触れるか触れないかの位置で止めて目を伏せていた。前の主人に指導されたという熟考する時のしぐさだった。雨音が車の中に響かなければ彼女から幽(かす)かな機械音が漏れているに違いない。なぜこうも熟考しなければならないのか分からない。彼女に聞いたことはだた「私の名前が分かるか」の一言なのだ。

町へと車を走らせる中、雨音にまぎれて搾り出すような夕子の声が私の名を言い当てた。私はその声を空耳かもしれないと疑ったくらいか細い声だった。夕子はこめかみに触れていた手をゆっくりと手を腿の付け根へと下ろし、目を車窓へと向けた。その視線の先には雨に叩かれた硝子窓があるだけだ。しかし、彼女の視線の先には雨に叩かれる窓以外の何かがあった。無表情の彼女からは何も推し量れない。ただ、しばらく私の名を口にした後、彼女は黙り込んだ後「何故、こんなにも単純で深刻な失敗をしてしまったのでしょうか」と私に聞いてきた。「私は君のような複雑な機械にはたまにあるものだ。しかも複雑な経験もしている。複雑でない単純な失敗でよかったではないか。でも一応心配だ。君を買った店へ点検してもらおうと思う。何も無いと思うが」と平静を装って答えた。この言葉に励まされたわけではないだろうが彼女は「町へ行くのですか。それならば」と普段通りに家に今不足している物を買足そうとごく普通に私に提案し、私はその話題に乗った後、「紅茶の茶葉も買足そう。今朝の紅茶は即席ものだが美味しかった。毎朝、飲むことにしたい」と言った。彼女は「分かりました」とただ頷いた。

無表情が恨めしかった。
もし笑顔の一つでもあればいいと思う。よくよく考えれば彼女は機械で感情を持たない存在だ。けれど彼女の表情の無い顔の中に感情らしきものを感じる時があった。複雑な電子算譜（プログラム）の雑音のようなものかもしれないが、それは私の目に確かに感情として映った。それは常に幽（かす）かな寂しさのようなものであった。僅かな喜びも含んでいる時も感じられる時もあった。しかしその全ては彼女の過去に深く結びついているように感じられた。その彼女の持つ寂しさと同様のものを私は自らの心の内に持っている。

車を運転しながら心配になって横目で一瞬、彼女の横顔を見た。その顔は妻の顔と似ていた。造形的な玲瓏さをもった容姿と年老いた妻とは似ても似つかないが、その常に帯びている気質とか感情のようなものが酷似しているように感じられた。運転のためにまた前を向いて運転する。雨脚は弱まり、しとしとと弱く小さい水滴が車窓を濡らしていた。その水滴とそれを切り流すワイパーを見ている内に夕子の横顔と妻の横顔が重なって見えた。あの時、妻の横顔が思い出された。

○

具合が悪いと青い顔の妻が病院へ行くと夜中私を起こした。具合が悪い、らしい。確かに最近妻は発熱することが多く、身体が弱っていた。風邪を悪化させたらしいと聞いていた。私は慌てて電話をするとすぐに受話器に受付の人が出て、容体を聞いてきたので、私は妻にどんな容体かを聞いた。しかし、妻は私から電話を奪うと何やら小さな声で主治医の名を出し、今から緊急外来の方へ行きます。

と言い半ば一方的に電話を切った。お互い寝間着のまま、妻にはコートを羽織らせ、一刻でも早く、と車に乗り込んだ。私の家は総合病院から近く、歩いて五分のところに位置してた。それでも青くなった妻の顔をみると気が焦った。道を急ぐと病院までたった二つの信号というのにその一つに足止めされた。私は妻の容体が気になり横目で妻を見た。信号機の赤い電灯が彼女の顔を赤く染めていた。その赤く染まり何の感情も表してない顔が何か不安感を煽らせた。「大丈夫か」私の声に「ええ」と一言答えたきり、他は何も言わなかった。

病院へ着くと緊急外来は私たちの他に咳き込む赤ちゃんを連れ、心配そうに話あっている夫婦と死人のように青い顔の男。そして椅子に座りじっとリノリウムの床を凝視し、忙しなく貧乏ゆすりをして何かを待っている男がいた。妻は受付の人に自分の名を出した。受付は全てをは了解しているらしく妻は待たずに病院の非常口の緑の光が照っているだけの暗い通路の奥へと案内されていった。その時は妻が昔、この病院の事務職をしていたので融通がきいたので待たなくてもいいのでは、と暢気に思っていた。私は椅子に座って妻の帰りを待った。

他の人たちも次々呼ばれて何か薬や応急処置をしてもらって帰って行った。ただ私と床を凝視している男とが残された。やがて一つの部屋の扉が開いた。マスクをした医師が出てきた。それと同時に先ほどまで床を凝視していた男が飛び上がらんばかりに医師の方へ歩む。医師の目は躊躇っていた。明らかな戸惑いと後悔を目に写しながらマスクを取って「残念ですが」とうな垂れながら言った。一瞬時間が止った。私ですらその意味することが分かった。「奥様は交通事故で」医師も言葉が続かない。言葉も時間も人もここに存在した全てが立ち止まった。その全てが止ってしまった空間で最初に動いたのはやはり医師だった。言葉もなくそこにいながら抜け殻のようになってしまった男を部屋の奥へ促す。医師と私は目が合った。

私はただ頭を垂れた。医師も軽く目を伏せた。

その時、妻が薬袋を持って暗い通路から戻って「何があったの」と聞いてきた。私は「ちょっと容体の悪化した人がいたみたいだ。よくなるといいけど」と言った。何か不穏な出来事を具合の悪い妻の耳に入れたくはなかった。妻も「そう」と一言言ったきり何も言わなかった。「それより具合は」と私が問いかけると「点滴してもらったから大丈夫。後は家でゆっくり休む」と気だるそうにしていた。

その三日後、妻は居間で倒れた。何故か花束を買ってきて花瓶に入れる途中だった。花束も花瓶も妻も畳の上に転がって一緒に動かなくなっていた。思わず妻を抱き上げた時、何もかもが止ってしまった妻の身体の感触が今でもこの腕の中にあった。

私は妻が深刻な大病を背負っていることなど知らなかった。そして妻は遺書すら私に残してくれなかった。

○

「君は」私は夕子に言いかけた言葉を飲み込んだ。

「どうしたのです」聞き返してきた夕子に私は「なんでもない」と取り繕った。

君はどうしてそんな顔をしているのだ、と聞いても帰ってくる言葉は想像できた。彼女は人ではない機械なのだ。妻のあの顔を思い出す。どこか夕子と繋がっているような表情だった。もし夕子に感情があればきっと妻と同じことを思っているに違いない。

一体君たちは何がそんなに悲しいのだ、と心の中で夕子に聞いてみた。

夕子は九十三年稼動してきましたが悲しみという感情をいまだ知りません、と答えた。
そう答えて欲しくは無い。だから聞かないのだ。

老婦人

町へと着くとあの介護用品専門店へと向かった。もう昼近いのに、ほとんどの店はシャッターが下りていた。以前よりさらに閉店した店は増えたかもしれない。雨が降ったせいか町に人はほとんどいなかった。たまに生活雑貨や食品を入れた買い物袋を持った老人とすれ違うくらいだ。そんなアーケード内を夕子を連れて介護用品店を目指して歩いた。しばらく歩いてたが、どういうわけか通り過ぎたように感じられ、またもと来た道を戻る。店を見失わないように注意深く歩いた。

店を見つけると、どうりで見失うわけだと思った。介護用品専門店にもシャッターが下り、他の閉店した店と同様にアーケード街の風景の一部として溶け込んでいた。そのシャッターには張り紙がしてあり「永い間ご利用いただきまして、ありがとうございます」と書かれていた。私はその文字を見て呆気に取られた。

「閉店ですか。困りますわよね」と、この私と同じくこの店に用があったのか、買い物袋を持った老婦人が歩いてきて私に言った。

「ええ、困りました」私は簡潔に同調して答える。

「何を買いにいらしたの」

「いえ、ちょっとこの子の点検を」と言い、老婦人の顔を見た。それはどこかで見た顔だった。

「失礼ですが以前、お会いになりましたか。何か貴女の顔に見覚えがあるのですが」

「いえ、お会いしたのは始めてだと思います。それとも私、口説かれていますか。今度すれ違った時に手巾(ハンカチ)でも落とそうかしら」そう言って微笑み「この店がなくなると困りますわ。隣町までは遠いし、病院の商品は値段が高めですから。そうは言っても閉店してしまったらどちらかにするしかないのでしょうね。そうそう、その子、以

前この店で売られていましたよね」と言い、夕子に向かって「人の良さそうな方に買ってもらってよかったわね。口説き文句が少し古典的だけど」

その言葉に夕子は軽くお辞儀をした。

私は老婦人の言葉に年甲斐も無く少々照れを感じながら「どこかアンドロイドの点検をできるところはないでしょうか」と言った。

「この頃はどこも閉店しましてね。昔は斜長石採掘用のアンドロイドが多くいたので工場も多かったのですけど。今はもうどこも閉店しています。発売元へ問い合わせるのが一番だと思いますわ。それにしても、この子、どこか悪いの」

夕子が老婦人の声に反応する前に私は「いえ、定期検査ですよ」と言った。

何故だか夕子の欠陥を言うのが憚られた。

老婦人は「そう、それでは」と言い、もと来た道を帰っていった。見送った後姿を見て老婦人どこで見たのか思い出した。確か夏にバス停のベンチに座って白い日傘を持ち鼻唄を歌っていた人だ。あの時、私は彼女は地球へ帰る人だと思っていた。だが彼女はまだ残るつもりらしい。今の彼女に地球に行く気配を感じなかった。もしかしたら私と同様に残りの人生、月で過ごそうとしているのかもしれない。彼女はおそらく一生の大半をここで過ごし、たとえ住み難くとも、ここ以外に自分の居場所を求められないのだろう。私と同じく残りの人生をここで終えるにしても理由が違うように感じられた。ここに残る大半の人はそうだ。私は場違いな人間だろうか。例えそうだとしても全然構わないが。

○

夕子の調子も私の名を思い出してから落ち着いているようだった。

買い物をすませ、家に戻ると久しぶりにネットに繋いだ。様々なニュースがネット上に提示されていた。私は世捨て人ではないがそれに近い生活を送っている。自分とは違った時間の流れのようなものが垣間見れた。太陽系外に新天地を見つけそこに向かう人類の船は着実に完成に近づいている。その船を動かすための木星資源の供給も十分に補われそうだった。世の中は進んでいる。私に一向に構わず。人類はまだ若く、あらゆる方向に向かって全力で伸びてゆく樹のようなものに思えた。深く地中に根を張り巡らし、空に向かってどこまでも枝を伸ばしてゆく。私はその樹にあった一枚の葉だ。月はその葉をつけた枝。もうどちらも枯れ果て地に落ちようとしている。その枝葉を見ているものはいない。

私はニュースを見終わると大東亜工業のサイトに繋いで問い合わせに夕子の型と欠陥の症状をできる限り詳しく書いて送った。数分も経たない内に問い合わせから返信が来た。

「現在、お客様の商品のサポートは行われておりません。直営店の修理サービスも行われていない型です。修復には製品の初期化をおすすめ致します」

その後には新製品の広告がどっさりと添付してあった。怒りを感じてネットを切り、ノートパソコンを閉じた。夕子がいつもと変わらず珈琲を持ってきた。私はそれを一口飲むと言った。

「歌を歌ってくれないか。もし嫌なら止めてくれ」

目を瞑り、大きく深呼吸をし、怒りをほぐした。

私の要望に夕子はあの歌手の歌を歌いだす。

私の人生を振り返ってみる。人生で美しいものにいくつも出会ったし、それを私なりに解釈して文章にして人に読んでもらっていた。しかし、今現在、振り返ってみて、その中で本当に自分の心に残っているものを数えた時、それはたったの五、六個くらいしかない。子供に玩具を多く与えても五、六個を大事にするばかりで他はぞん

ざいに扱うらしい。結局、人は大きくなっても年老いても本当に大切なものは五、六個しか心の中に残らないのだ。この歌は私の人生に於いてこの五、六個の内の一つとして心に残るものだ。この歌を作った歌手は全ての存在を消して、ただこの歌だけの存在になって私の前にいる。それはまるで何万光年離れて尚、光り輝く星のように私の心に響いた。彼女の光がこの歌に宿っている。

初期化と簡単に言ってきた販売元に腹が立つ。これを消せというのか。夕子の記憶を消せというのか。できるわけがない。

＞i250010—3265＜

ビンの中の手紙

夕子にとってこの歌は前の主人から頂いた遺産であり、かけがいのないもののはずだ。
感情があろうがなかろうが関係はない。ただその光を胸に抱き続けて欲しかった。それが感情というものを持たないアンドロイドだったとしても。だが一方で私の身勝手だろうか、とも思う。この記憶を消して夕子は欠陥が直るとしたら、その方が良いのではないだろうかとも心の一部で思っている自分もいた。

歌の詩の意味するところは相変わらず分からない。ただ、この歌を歌う時の夕子には明らかに感情が感じられた。それは寂しさの中に含まれる幾許かの優しさのようなものだった。これは彼女の前の主人のものだろう。それを夕子は完全に自分の中に保存し、歌に現す。私はこの歌はまだ二回しか聴いていない。ただいたずらに聴くのは悪い気がしたからだ。そしてこの歌に慣れ、この感動が薄れるのが嫌だった。歌の最後は「フェリオ」という言葉で終わった。もしかしたら「フォリカ」かもしれない。私の中でその言葉が引っかかり、何か出所を失った生き物のように頭の中で足掻いていた。

「終わりました」夕子は余韻を穢さぬよう静かに言った。
「一つ聞き忘れていたことがある。この歌の曲名は何だ」
本当は聞き忘れていたわけではない。何故か曲名やこの歌について聞くのがやましいように思えていた。これは聴かれるために作ったのではないような気がしていた。そこに聴き手がいなくとも存在するだけでこの歌の価値があるように感じていたのだ。私が誰に見せるわけでもなく『モズ』を執筆しているのと同じような雰囲気がこの歌から感じられる。
「『ｆｅｌｉｃａ（フェリカ）』です。ただ私にはこの言葉の意味するところが

分かりません」
夕子の言葉を聞いてはっきりした。
「エスペラント語で『幸福』という意味だ。昔、宮沢賢治の詩集を編集した時に少し齧った」
「私の機能にはサポートされていない言語です。この言語はもう使われていないのでしょうか」
「そうだな。まだザメンホフの意思を継いだ人々がいるようだが、今ではもうほとんど使われていない言語だ。この歌の詩を訳そうと思ったが難しそうだ。君は前の主人からこの歌に関して何か聞いていないか」
「いえ、ただ『貴女に教えたい』『歌ってもいい』とだけ言われました」
幸福の歌をアンドロイドに与えた前の主人の気持ちを考えた。しかも詩の意味を教えないで「幸福」と歌わせる。これはどういうことか。しかもほぼ絶滅言語で。
「ｆｅｌｉｃａ（フェリカ）」私はそう呟いた。
夕子の前の主人のことを思った。一番幸せだった時はとうの昔に過ぎ去り、想い出の中でしか孤独な人がこの夕子と一緒に暮らしていた。そして自らより長く生き続けるであろう夕子を残し、逝かなければならないとしたら。

私は静かに悟った。彼女は夕子を愛していた。実の娘のように。

その彼女の気持ちを考えた時に、無人島で暮らしている孤独な人が何か望みを託した手紙をビンの中に入れ、海に投げ入れる姿が思い浮かんだ。それは誰かに受け取って欲しくて出すのだろう。けれど同じ量のあきらめもある。ただ書かなければならないのだ。そうすることによって孤独とは少し離れられる。それは願いでも希望でもない。それは祈りだ。
私はそれをたゆたう静かな海から掬い上げ、受け取ったような気が

した。
「なぁ夕子、君にとって幸せとは何だ」
「貴方の生活のお手伝いをすることです」

夢見る機械

まだ身体の動く内は自分で家事をしようと思っていたが、その言葉を聞いてから家事全般の一切を夕子に任せた。夕子は相変わらずの無表情でそれを受け入れ、家事をやっている。ただ私がやりやすいように配置した食器や箒（ほうき）、アイロンやミシンなどが夕子が使いやすいように配置された。少し不便も感じるが、まあ、良しとしよう。私が慣れればいいのだ。珈琲は出されるし、朝起きると紅茶まで出してくれる。料理はやや味が濃かったが、私が指定すると次の日には改善された。味付けを工夫するのではなく文字通り改善という言葉が似合うような味付けだった。もしかしたら私の見ていないところで調味料の分量をいちいち量って作ったのではないかとすら思われた。その真率さが機械のそれだ。だが無表情で生真面目で若い顔立ちの夕子を見ていると、勉学に励み、将来は己がこの世を支えねば、と志す純粋な書生のように見えて微笑ましくも感じられた。そして私との生活に慣れてきたためか私の小説に興味を覚えたらしく質問するという人間じみたところも出てきた。

「冬虫夏草はやはり花を咲かせるのですか」

「そうだ。きっと君が言うのだから花を咲かせるのだろう」

「いえ、私は言葉の雰囲気からおそらく咲かせるのだろうと想像しただけです」

「君の想像はいいよ。うん。とても綺麗な想像だと思う。きっと花を咲かせるのだろう」

「本当のことを仰ってください。間違った情報を覚えるのは嫌なのです」

「何故」

「もし間違った情報を人に提供してしまったらアンドロイドの沽券に関わります。機械の言う事は往々にして信じられてしまいますから」

「いいではないか。私の中では白い花を咲かせるのだ」
「ではご主人の中だけ限定で冬虫夏草は花を咲かせるということで。後で本当の冬虫夏草について調べておきます」
「嘘を覚えた機械というのも可愛げがあって面白いのにな」
「人に嘘を教える機械なんて可愛げも面白味もありません。役に立たない機械ではないですか」
「違うよ。夢を見る機械というのは可愛げも面白味がある」
夕子は私の言葉に滑らかに肩をすくめ首を左右に振った。
「それは前の主人に指導されたのか」
「ええ、こういう時に使えと指導されました。間違ってない自信があります」
前の主人にどういうふうに習ったのか知らないが、応答の鮮やかさに独自のユーモアを感じて私は笑った。私の顔を見て、夕子はもう一度肩をすくめた。確かに間違っていない。

○

今日は気分が悪く、どうにも眩暈がした。土中の中の空気が澱んだように感じ、喉に手をやる。何か自らのもので無い不可思議なものが喉にすら絡み付いている。引っこ抜こうとするがどうやら喉仏から這い出たもののようで痛みがあった。痛みにきりきり舞いをし、痛みを鎮めようと横たわる。モズはそれが身体を蝕むものだということに気付いた。喉仏をやられてはもはや歌を歌えぬ。モズはこの境遇を呪うだろうか。皆の歌声を妬み、羨むだろうか。彼の呪詛はいつまで続くだろう。
だがモズは冬虫夏草を愛さなければならない。

どうやったら愛せるのか。単に自らの運命の外にある幸福を呪えばいい。歌を呪い、空に羽ばたくものを呪う。だがモズは呪い続ける言葉を多くもっていない。歌も空も呪い続けるには、あまりにも善良な存在だった。モズは自らに無関心で無情な世界を無心に愛していた。自らの境遇に対する恨みすら暫しの合間に心の奥底に沈殿するほど愛していた。モズは自らの運命をどうしたら愛せるのだろうか。

○

冬だというのに朝から晴れ渡っていた。空は寒気を持った刺すような風に晒され、まるで青く磨かれた鏡のように輝き、空気草の枯れ野には目を凝らせば僅かながら生命の気配すら感じられそうな日だった。私はいつもと同じように夕子の淹れた紅茶で目を覚ます。月の食料品店にはどういうわけか珈琲は即席のものばかりだったが、紅茶は茶葉が売られていた。何か言いようのない不満を感じたが美味しいものを飲んで目覚めるのは悪くはない。そしてご飯に味噌汁、目玉焼きと水菜という簡素な食事をすませ、ノートパソコンに向かい『モズ』を執筆する。

家事全般を夕子に任せてから私の日中のやることといったら散歩か読書くらいで、たまに音楽を聴きながら海でも眺めているくらいだった。ただ何かの拍子に昼間にも執筆をすることがあった。脳裏に湧き上がる創造に歯止めが出来なくなるのだ。脳裏に沸き起こる戯事に近い言葉拾いと、いたずらに複雑な心理が私を攻め立て机上へと向かわせる。現役時代はこれを待ち焦がれて仕方なかった。これが来ればいい作品が書けるような気がしていた。しかし期限を決められて書かなくてはならない身の時は、これが来なくとも無理矢理

書かなければならなかったが、現役を退いた身にはこの感覚というものは逃してはならないし、期限も特に定められていないにで、この感覚が無いときは逆に書かない方がよいようにも思えた。

今日はその感覚がやってきた。『モズ』の話に没頭した。どれだけ時間が経ったのか分からないくらいだ。しかし遂に疲労を感じ時計に目をやった。朝食を食べてからすぐ書き始めたはずだったが、もう時計の針は三時を刺していた。机にはノートパソコンと何冊かの本、メモ帳、鉛筆、消しゴム。いつもの珈琲がないことに気が付いた。それどころか昼食も食べていない。

「夕子」

私の声は家の隅々に響いた。けれど返事がなかった。まるで最初から夕子などというアンドロイドが存在しなかったように静まり返っていた。この家に一人で何年も過ごしてきたというのに一人になった途端、急に家の中が広く感じられた。どこにも夕子の気配を感じない。慌てて外に出ると車がなくなっていることに気付いた。もしかしたら町へ買い物に出かけたかもしれない、と私は自分自身を納得させ、夕子の帰りを待つことにした。

外は冬に似合わない夕日が彩雲を照らし美しく没落してゆく。その他は何事も変化なく、ただ時間ばかりが過ぎていった。

桐の箱

夕闇はとうに過ぎ、窓からは硝子越しに冬の寒空に星が煌いていた。寒気が家を覆い、壁と暖房の温かな空気越しにも冬の寒気を感じる。その中で一向に帰らぬ夕子のことを考えた。あの白く冷たい指がこの寒気の中で更に冷たくなる。身体の末端からやがて深部へ。彼女は全く意に介さないだろう。

私は年老いた。私の時間はもう残り僅かだというのに、何故かこんなにも時間が多く感じてしまう。時間が間延びし、全てがゆっくりと進んでゆく。時計の針は急に鈍く感じられた。ついこの瞬間にも玄関の扉が開く妄想を抱いてしまう。

夕子がどこへ行ったのか分かる。けれどそれがどこなのか分からない。

「笑顔が作れず、人の死を認識できないのです」彼女が大事な暗号を確認するように言った言葉を思い出す。そうだ。彼女は「人の死を認識できない」のだ。彼女はまた壊れた。唐突に何の前触れもなく。きっと今、私の名を忘れ、前の主人の家にいるのだ。きっとそこは誰も暮らさなくなった廃屋だろう。そこに着いた夕子は廃屋の掃除をするのだ。どうしてこんなにも埃にまみれているのか考えもせずにいつものように無表情で仕事をこなす。そして晩御飯の時間になると台所へ向かい、料理を始める。しかしそこに食材も調理道具もないことを知る。彼女はその時、前の主人に習った仕草で中指と人差し指をこめかみに触れるか触れないかの位置に置き、うつむき考える。長い時間をかけて電脳の隅々から情報を取り出し、整理してゆく。その時、私の名を思い出してくれるだろうか。それともそのままじっと動かなくなって、この寒空の下の廃屋の中で氷の彫

像のように停止してしまうのだろうか。

寒気が身に染みてこないように上着を羽織った。

夕子のことはあくまで想像だ。本当のところは分からない。事故だろうか。事故なら連絡があっても良さそうだが、電話は音を立てず、ただ古びた置物（アンティーク）のように卓上（テーブル）を飾っていた。警察に連絡をしようか、とも考えた。しかし、もし万が一夕子に欠陥があるのがばれたらどうなるだろうか、と考えると連絡する気にもならない。警察は認識能力が低く、主人の名を間違えるようなアンドロイドは完全に直すように指導するに決まっている。彼女のことを何も知らず、初期化させ、それでも直らない場合は容赦なく破棄させるに違いない。今はただ待とう、と思った。夜が空けてから探しに行こう。私は立ち上がり珈琲を淹れた。どうせ今夜は眠れない。

椅子の背もたれに深々と腰を下ろした。本を読んでも集中できず、音楽もただ耳障りな音に聴こえるばかりで何の慰めにもならない。ただ無感動に白い壁を見つめ、私にとって重要なものがまた致命的に損なわれてしまうかもしれない状況を想像した。いつもそうだ。何も分からずじまいで何もかも終わってゆく。

何故、花束だったのか。遺書も残さずに。

私は妻と一体何年共に過ごしてきたのだろう。間違いでできた亀裂はどこまで深かったのだろう。分かり合えていると感じていた時間は妄想だったのだろうか。何も分からず、ただ傍にいた。それは夫婦生活といえるものなのだろうか。未知の相手と生活を共同し、枕を並べて眠る人生は、ただ単にお互いが傍にいて、そのまま年老いただけの人生だったのだろうか。

白い壁を長く見つめていたためか目が疲れたので、深く目を瞑った。

花束と花瓶が居間の床に転がっている。畳は花瓶から漏れた水で変色していた。妻は私の腕の中で何もかも終わらせていた。

私は思わず立ち上がってクローゼットから勢い任せにコートを引っ張り出すとそれを上着の上から羽織った。そして玄関へ来た時に玄関の戸が開いて、夕子があらわれた。

「馬鹿野郎」

開けっ放しの玄関の向こうの空気草の枯れ野まで私の声は響いた。その後何を言ったのか分からない。ただ怒鳴っていた。冷たい空気が玄関を満たし、その空気が私の肺に入ってきて咳き込むまでずっと怒鳴っていた。夕子はその声にやはり無表情に俯き、私の怒声が止むのをじっと待っていた。

「いたか」

私は肩で息をしつつ、夕子に聞いた。その声はしわがれていて、喉が痛んだ。また私は少し咳き込んだ。

「いませんでした。どうしたのでしょう。どこにもいないのです。こんな寒い時に一体、どこへ」

「君の前の主人は死んだ。死んで全てが無くなったのだ。寒さなんぞもう感じない。お前の最愛の人はもういない」

自分の言葉に花束と花瓶が落ちている居間を思い出した。その花はもう枯れ果てていた。家の家具は売るか新居に運ぶ手続きをした。家の中は私が慣れ親しんだ雰囲気を僅かに残して、新しい住人の訪問を待っているようでもあった。しかし、枯れた花があるその一角だけは妻の最後の証として手付かずに残っている。

「何故泣いているのですか」

妻は私が片手で抱こうと思えば抱けるくらいに軽くなって帰宅した。もう私に病気を隠す必要もなければ、苦しむ必要も無い。「お茶で

も飲もうか」と私は卓袱台に座り、妻に言った。そして湯のみにお茶を入れ妻の前に出す。私はお茶ゆっくりと味わって飲みながら想い出話を話した。時間が過ぎゆくのを忘れて。話終わっても妻の前に出されたお茶は一向になくならない。「どうした。お茶、冷めたぞ」私は桐の箱の中で骨だけになった妻に話しかけていた。

夕子の言葉に思考が鈍る。夕子の前の主人を思い慕う姿を見るたびに昔の自分を見ているような気がしてきた。心が散り々々になり、眩暈すら覚えるほど均衡を失い、言葉が口から出てた。

「君の欠陥を直す方法がある。初期化だ。今までの記憶が無くなり、前の主人の記憶も歌も無くなるがどうする」

「ええ、それで欠陥が改善されるのであれば……」

「言うな。お願いだ。それ以上言わないでくれ」

私は夕子を抱きしめ、縋(すが)るように泣いた。

また人を傷つけた。決定的に。その傷はそのまま私の胸を裂いていた。

車椅子

車の鍵は私が常時持ち歩く事にした。欠陥が夕子の認識を狂わせ、昔いた家へと向かわせたとしても私が鍵を持っていれば車は使えない。そう遠くへはいけないだろう。万が一の時を考え、夕子に昔住んでいた家のことを聞いたが、個人情報は答えられない、とういう機械らしい返答が返ってくるばかりだった。

しかし、その機械らしい言動と普段の仕草との差異がある。前の主人の愛され続けて生活して、さらに行動について逐一指導されてきたためか、僅かな行動が常に人のそれだった。人の行動、仕草にはその人の感情が見て取れるものだ。夕子はそれを習得していた。彼女の動きに明らかな感情を感じる。

あれからというもの夕子の無表情が時として悲しんでいるように見えた。眉目に含まれる心情はどう見ても悲哀のそれだった。私と相対している時にはそれは見せないようにしているようだった。しかし、家事をしている時、悲哀を盗み見たとき、私は私が言い放った一言を思い出し、胸が痛んだ。彼女には前の主人の想い出を常に胸に抱いていて欲しいと望んでいる。しかし、一方で欠陥により壊れていく夕子を見るのが辛かった。それはいまだ妻の死を引きずっている私と同様だからだ。

機械は感情を持たない、という。けれど私にはもうそんなふうに思えなくなっていた。

「なあ、あの時はすまなかった」

「初期化のことですか。それで私の性能が戻るというのであればやってもらっても構いません」

「もういいのだ。君の機能は今の性能が一番優れている。ただ少し人間臭いだけだ」

「人間臭いとは」
「時々、亡くなった最愛の人を思い出す。そうすると何も手がつかなくなって出かける。……そんな君の存在が私になくてはならないものだ」
「その言葉に少し気障（キザ）な印象を受けます」
「物書き商売だったから仕方ない」
「そういうものなのでしょうか」
私は欠陥や機械に関しての話題を避け、人と対応するように心がけた。
機械らしい受け答えをさせないよう、人らしく返答するように夕子の言葉を誘導した。
冬中、外にあまり出かけず家の中でそれを繰り返した。
それが悪かったのか、それとももう手遅れだったのか。夕子が何か考える時、こめかみに中指と人差し指を触れさせ俯く時間が長くなっていった。

程なく、車の鍵を私が持っていなくてもよくなった。
春の朝、台所から陶器が割れる音がした。卓上（テーブル）からお盆を持とうとした時に手を滑らして転んでしまった、と夕子は言った。それ以来、夕子は歩けなくなってしまった。電脳は致命的に狂い始めていた。私はどうしていいのか分からず、とにかく夕子をソファの上に座らせた。
「今、私が修理できるところは修理するから」とネットを検索し、自分でできるところまでやったが、いかんせん、前時代の型のアンドロイドで部品もない。もっとも足の部品に故障はみられなかった。原因は電脳だ。しかし、原因は分かってもそれをどうしようもない。その間、夕子はソファに座り、あの長く考える仕草で微動だにせず下を見ていた。瞳は光を失い、どこも見ていない。おそらく電脳の自己修正機能を作動させているのだろう。

「異常ありませんでした」

再び瞳に光を宿し、私の顔を見て言った。しかしその声に僅かに雑音（ノイズ）が混じっていた。私は、真っ暗で底が見えない深い谷底にいきなり後ろから突き落とされた気持ちになった。

「すまない」掠れて消え入りそうな声で夕子に言った。

何が悪かったのか分からない。初期化すれば良かったのか。だが、そんなことをしたら夕子を愛した前の主人の思いを無駄にするばかりか、私自身を否定することにもなる。歌も光も温かみの悲哀も彼女の全て無駄になってしまうのだ。

「すみません。足からの反応がありません」夕子は私の声が聞こえなかったのか私に謝った。謝るのは私の方だ彼女はあるがままに存在するだけだ。間違いを正せなかった私に責任がある。

○

足の動かなくなった夕子は私が以前、介護用品専門店で買った車椅子に乗せた。その車椅子で家事をする。家事やトイレなども座ってできる車椅子。そういう商品を選んだのだ。私が動けなくなったときのために買ったはずだった。それが今、同じ店で買ったアンドロイドが座っている。酷く間違っているように思えた。

車椅子に座って常に上目使いに私をみるようになった夕子の表情に深い翳（かげ）が横たわるようになっていった。

「なぁ夕子、君にとって幸せとは何だ」

「貴方の生活のお手伝いをすることです」

ｆｅｌｉｃａ（フェリカ）は遠のいて行く。

けれど私は暗闇の中で光を求めて必死に足掻いていた。

涙色

モズは地中で気だるく横たわった。苦しみや痛みは以前、身中を駆け巡っているがその痛みを逃すためにのたうつ体力も気力も残されていない。冬虫夏草が身体を蝕む行為にモズは抵抗する術はなく、ただ身を任せる他ない。この自分に対して理不尽で無関心なこの世を恨む気持ちも心の奥底に沈殿し、ただ心は身中の痛みを虚ろに見つめていた。そこに救いはあるのか、私が聞くと、無いとただ一言、答えた。救いが無いのならいっそ舌を噛んで果てれば、あるいはもう少し楽になれるのではないのか、私は再び聞くと、それではこの冬虫夏草が可愛そうではないですか、と苦しそうに口の動きだけで私に伝えた。

思考に靄(もや)が立ち込めている。心情とか、身体とか、顔とか、風景とか、おおよそ文章に表すことができないものが靄となって文章の中に立ちこめてモズを掻き消してゆく。この靄のせいで書き続けられなくなるが、この靄を心の中に留めているとある時期にこの靄がはっきりと形作られ、ぴたりと小説の中に組み込まれてゆくことがある。この靄の正体を探る時間というものが必要らしい。はっとした閃きのようなものは小説の中に簡単に作用してくれるが、その閃きは文章の中では彩色は淡い。けれど靄が時間をかけて形作られるとその性質は深度を増し、色合いも鮮やかになる。今は靄の中へモズは消えていった。しかしこのまま永遠に消え去りはしないだろう。彼は戻ってくる。その時、彼は私に語ってくれるはずだ。

モズは冬虫夏草を愛さなくてはならない。

○

ノートパソコンを閉じるのと珈琲が運ばれてきたのと同時だった。
私と同じ目線で夕子がいた。「珈琲をお持ちいたしました」丁寧なお辞儀だった。機械のそれでもなく、人のそれでもない丁度、中間に位置するお辞儀。このお辞儀はいつもの夕子のものだ。しかし声には雑音（ノイズ）が常に漏れるようになっていた。夕子はいつまでこのお辞儀をし、いつまで珈琲を運び続けてくれるのだろう。私は夕子から視線を外し、受け取った珈琲を飲んだ。いつもなら私が何も言わなければそっと立ち去る機微を見せる夕子が今日はどういうわけか立ち去る気配も見せずそのまま黙って立っていた。
「どうした」と私の声に「私は役に立っているのでしょうか」と夕子は私を真っ直ぐに見つめて答えた。
「立っているさ」
「そうですか。けれどご主人はお年を召しています。いつか足腰が立たなくなります。その時のために私と私が今、使用している車椅子を購入されたのですよね」
私は夕子から視線を外し、珈琲を飲んだ。私の頭の中で様々な考えが浮かび、消えてゆく。初期化をして夕子の性能が戻ったとして、全てまっさらになったアンドロイドは果たして夕子だろうか。彼女から全てを失わせることは私にはできない。けれどそれを夕子が望んでいることだったならばどうだろう。そんな思考は言葉として形作れることなく虚しく時は過ぎて行った。私はついに夕子と話すことを放棄し、そのまま黙ってしまった。その間、夕子は黙ってそこにいたが、私が何もこれ以上言わないと悟ったのか、場を外して台所で晩御飯の用意をし始めた。

ふとこの答えの出ない思考の内からまるっきり新しいもう一つの選択肢が出てきた。
それは枯れた花束の景色と共に私の思考からふいに浮上してきた選

択肢だった。

夕子を終わらせてあげよう。

彼女の後頭部の髪をかき上げ、そこに隠された操作盤（コントロールパネル）を出し、スイッチをオフにしてあげればいい。そして永遠にスイッチを入れなければいいのだ。そうすれば彼女は前の主人の記憶と共に永遠にそのままの姿でいられる。私が死に、この月が人類に放棄されて再び元のレゴリスの沙漠となっても彼女は夕子のままでいられる。

珈琲を飲んでいる時に口の中のできものが爆ぜていた。皮がめくれていて、舌で触れると染みるような痛みを伴った。老いて薄くなった粘膜は容易に細菌類の侵入を許してしまう。私も衰えつつある。衰えを感じるとその衰えがどこに行き着くのか考えた。私ももうすぐ居なくなるのだ。一切が終わってしまう。私がいなくなった後の夕子のことを考えた。誰もいなくなったこの部屋でこの場所に毎日、珈琲を持ってくる夕子の姿を思い描いた時、その心の内に映った残酷な景色を見て思わず目から涙が流れ落ちた。私は決意した。

○

冬は終わり、風は日増しに温くなっていった。空気草の草原には確かに生命の息吹が感じられた。いつか見た蝶はもう何の躊躇いも無くこの草原を飛びまわっているのかもしれない。その陽気と静かにたゆたう海を眺めているとこの春がいつまでも続けば良いと無責任に思ってしまう。

「いい陽気だから外へ散歩へ行こう」

私の誘いに夕子は相変わらずの無表情のまま頷く。私は夕子の車椅子を押して海へと出かけた。

見晴らしの良い場所へと立って海を眺めた。風は海から吹いていたが寒さはもう抜けており、海辺の草花もその風に揺られ、静かに首を振っていた。空は冬雲を吹き飛ばし青を深く濃く染めあげ、その向こうにはさらに青みの増した地球が半球となって海からぽっかりと顔を覗かせている。

「そういえば私がどうして月に着たのか話していなかったな」

「そうですね。どうしてここに来られたのですか。皆さん去って行きますのに。それにあと十数年でこの月は放棄される予定ですよ」

「それだから来たのだ。私はここで全てを終わらせる。ここに来る前、私は妻と暮らしていた。いい夫婦とはいえなかったかもしれない。どこか常に亀裂があった。お互い気持ちは通じていたと思うのだが、その亀裂が何かお互いの思いを阻んでいるようだった。君の前の主人と同じだ。それはねじれにも似た関係だった。素直に受け取るべき言葉を受け取れないような、それでいて私は妻を思っていた。妻はどうだろう。分からない」

話している内に過去の記憶が戻ってきた。老人は過去のことばかり話すというが、この年になって何故か分かった。未来が無いからだ。未来が無ければ必然的に過去のことを話す。未来へは行けない。過去には戻れる。そんな私の回顧など気にせず現在は春の陽気に包まれていた。

「その関係は過去に由来する。私の過ち(あやま)だ。悔いても悔い切れない思いに駆られて生きてきた。私たちの間に子供はいなかった。そのせいもあるかもしれない。だが本当のところは分からない。さっきから『分からない』としか言ってないな、私は。しかし本当に分からない。妻は病気で死んでしまった。しかもその病気を私に隠して」

死んだ妻を抱き上げると酷く軽く感じた。その軽さは病気により消

耗し、削り取られつくした身体の重さに感じた。その妻の下には百合の花の白を映えさせる多くの色とりどりの花々が鮮やかに落ちていた。

「遺書はなかった。妻の死後、私は抜け殻だった。そして私は妻に何をしたのだろう、と思ってばかりいた。妻にとって私は過ちを犯し、亀裂を作り、信じられない夫だったのだろうか。それなのに離れもせず一緒にいてくれたのは何故だ。何もかもが嫌になった。あの時……」

卓袱台に乗せた骨壷を入れた桐の箱に向かって私はどれだけのことを話したのだろう。

お茶が冷め、とりとめもなく桐の箱の中の妻に向かって話し続け、辺りが暗くなり、どうして妻から返事が無いのか不思議だった。暫くしてそのことを思い出した。私は呆然とし、そのまま寝床へついた寝床へついても眠りにつけず、部屋の壁を見つめていた。どれだけ時間が過ぎたのだろう。次第に朝日に照らされて明るくなってゆく壁をじっと見つめていた。

「せめて雨でも降ってくれたら。妻が死んだ時の空の青さは今も目に染みて残っている。雲一つないさわやかな青空だった。まるで腕の中の妻の死など無関心で、何事もなかったように青く澄み渡っていた。妻の死後、何事もなく、妻が存在したことすら忘れ去って過ぎてゆくこの世界。それが嫌になってここに来た。ここから地球を見下ろしてやった。ふいに涙がこぼれた。今まで悲しいのに涙すら出なかった。ここに来て始めて泣いた。……地球も宇宙も私の涙色に染まってくれた。

そして、ここに来てから病に倒れた。私の身体は妻と同じ病が巣食っている。もう私も長くはない。世界はまるっきり無関心ではなかった」

夕子は無表情なまま私の声に耳を傾けていた。

同調

「ここは私を受け入れてくれた。この月はまもなく人類から放棄され、元のレゴリスの沙漠となるだろう。私はここで死ぬ。月も私の後を追って一緒に終わってくれる。未練はない。けれど死期を悟ってもいつも疑問に思う事がある。何故、妻は死ぬ前に花束を買ってきたのだろう。特別な日でもないのに居間に花束を飾ろうとしていた。私に買ってくるように頼んでも良かったのに。病に冒され弱ったその身体で外に出て歩いて買いに行った。何故だ。それが分からない」

夕子が幽(かす)かに笑ったように思えた。風に吹かれ彼女の髪がなびいて顔を隠す。その髪を彼女が手で押さえた時には彼女の表情はいつもと変わらなかった。そして雑音(ノイズ)が混じった声で「聞けばいいのです」とはっきりと言った。

「奥様に聞けばいいのですよ。あの時、何故花束を買ってきたのかを。……そういえば奥様はどうなされたのですか」

雑音(ノイズ)はいつもより強くなっていた。いよいよ夕子の電脳に記憶障害が出ているようだった。私が先ほど話したことを忘れている。いや、彼女は私が購入した日から人の死を認識できなかった。人の死のことを話してもそれが永遠の別れだとは認識できないのかもしれない。しかし、その雑音の混じった声は今まで聞いたどんな励ましの声より温かかった。

「妻は」

死んだ、と私は言い掛け、言うのを止めた。「お悔やみ申し上げます」とあの夏の夕暮れ、永久影で夕子が私に言い、私がその言葉に怒ってしまったことを思い出した。夕子はそう言うしかないのだ。それが彼女の機能なのだ。そして「お悔やみ申し上げます」と言っても夕子は人の死を認識できてはいない。

「妻は本当にどこへ行ったのだろう。どこにもいないのだ。どこか

遥か遠くへ行ってしまった」
自然に言葉が出ていた。本当にそうなのだ。遠くへ行ってしまって姿も見えない。声も聞こえない。
「そんなに遠くへ行ってしまったのですか。では奥様宛てに今の気持ちをできるだけ正直に書いた手紙をください。私がその手紙を持ち奥様に聞いてきます。花束の理由を。そして連れて帰ってきます。ご主人と奥様は一緒に暮らすべきです」
「そうか」
夕子の話に合わせ私は話す。
「そうです。どれだけご主人が奥様を思っているのか、私はずっと見てきましたから。それを逐一報告します。それに居間に花を飾る人に寂しい人はいません。きっと嬉しいことがあったのでしょう。何か特別なことがあったのかも」
「特別なことはなかった。ただその日は空がどこまでも青く晴れてた」
「そうですか。奥様はご主人を思っていたのですよ。客間でなく居間に花を飾るなんて、きっとご主人に見てもらいたかったに違いありません。私が奥様に会ってきますね。機械なら旅費も安くなりますし、奥様は今、どこで暮らしているのでしょう」
夕子の言葉に晴れ渡ったこの空がそのままそっと私の胸の中へ入ってきたような気がした。胸に入ったその澄み切ったものが、ふいに目から溢れた。視界が涙で曇る。
「さぁどこだろう。火星かもしれないし、エウロパかもしれない。地球のレニングラードかもしれないし、ウズベキスタンかもしれない。もしかしたらブエノスアイレスかもしれない。もっと遠くかもしれない。人類が見つけた太陽系外の新天地より遠いかも。それとも、もしかしたら……もしかしたら、ずっと近くにいるのかも」
私が話終え、しばらくして夕子が小刻みに震えながらこめかみに右手の中指と人差し指を触れた。震えというより振動に近い。「大丈

夫か」と私の声を手で制し、何か機械にしか感じる事のできない苦痛のようなものと戦っているようでもあった。しばらくしてその振動がおさまった。
「私は」その声は、声に雑音が混じるのではなく、雑音の中に声が混じっていた。
「今、私はご主人と会話ができているのでしょうか」
「できている」
「それはどの程度でしょうか」
「人並みに……いや、人以上に。温かく話しているよ」
「よかった。お願いがあるのです。……歌を歌わせください」
「いいよ。聴きたかったところだ」

いつもより長い静止の後、雑音（ノイズ）の混じったハミングが聴こえ始めた。私の前の主人が夕子にあげた歌だ。題名はｆｅｌｉｃａ（フェリカ）。エスペラント語で「幸福」を意味する。歌詞の内容は分からない。調べたところでは最後にこの言葉が多く使われたのは火星開拓時代のようだ。当時、火星で英語を世界共通語として当然視してしまう姿勢への反発があり、国と国の境をなくし、地球を離れ人類として生きるという意義について考えた人たちがエスペラント語を習得したらしい。もしかしたらと思う。夕子は一切、嘘を言ってないのでは、と。何故かそう思った。前の主人は夕子を思い、夕子は前の主人のことを思っている。そうだ。思っているとしか思えないのだ。目の前からいなくなった前の主人のことを知って欲しかったのではないか。誰でもいい、前の主人の孤独を少しでも分かって欲しかったのではないのか。ただ機械の規則として嘘を言わなければならないから、嘘を交えた、と言っただけなのではないのか。この歌を聴いているとそうとしか思えない。夕子には確かな心がある。なぜなら雑音（ノイズ）が混じったこの声すら私の心を動かす。そして動かされた心は行き場をなくして、涙となって溢れてゆき頬を伝う。

この歌を歌い終わったら夕子の全てを終わらせてあげよう。このまま壊れていき、いつか前の主人に対しての思いも失うまで壊れるかもしれない。このまま壊れてゆく夕子を見ているのは辛かった。

夕子は「ｆｅｌｉｃａ（フェリカ）」を歌い終わる。歌の余韻を感じながら私は夕子の後頭部に手を触れようと手を伸ばした。しかし私が手を伸ばすより先にそっと夕子が後頭部の髪を上げた。そして普段は内臓されている操作盤（コントロールパネル）が夕子の後頭部からゆっくりと出てきた。

「お手数かけます」

私は呆気に取られた。

「分かっていたのか」

「なんとなく感じてました。そして……本当は自分で押したかったのです。ずっと前から押そうとしていました。本当にずっと、ずっと前から。ご主人と会う以前からずっと。前の主人の姿が見えなくなってから……でも、できませんでした。私の中にある原始の電子（プログラム）算譜がそれを拒絶し、命令するのです。動けと。ですがもう疲れました」

私は何も言えず立ち尽くした。夕子の気持ちとまるっきり同じ気持ちを私は感じたことがあるから。

薔薇、色と声

「最後にお聞きしたい事があります。いつかご主人は私を薔薇に例えました。埋もれた薔薇のようだ、と。私は地中に埋もれたら薔薇は腐ってしまう、と返答しました。その返答を聞き、ご主人は笑われました。機械の私にはどうしても分からないのです。埋もれた薔薇の色とはどういう色なのでしょう」

「埋もれると言っても地中ではない。多分、人の手の中だ。人の手といっても、もちろんそのままの意味ではないよ。君にその話をしたときは人の寂しさだろうか、とも思った。けれどそれは違う。人の温もり、優しさに包まれ五十年ほど埋もれた薔薇の色だ」

「抽象的過ぎて機械の私には想像もできません。その花はどんな色でしょうか」

「くすんだ薔薇の色だ。侘しさを滲ませつつ、悲しい。けれど優しさに埋もれただけあって、温かみを持っている。綺麗だ。とても綺麗だと思う。触れるのを躊躇うほど」

「抽象的で想像の産物なのでしょうけど、まるで見てきたように言いますね」

「今、見てる」

私は操作盤（コントロールパネル）の電源スイッチに手を伸ばした。

○

私（あたし）はくすりと笑った。

そんな古典映画（ハリウッド）の役者も言わないような気障（キザ）な台詞もさらっと言うから町でおば様にからかわれるんですよ。まったく一緒に歩いている私の身にもなってくださいよ。恥ずかしいったらありゃしない。

そういえばお母様も……そうそう、前の主人ね。自分のことを『お母様』って呼ばせていたんですよ。それで私を娘扱い。連れて来られた日なんて家事もさせないで、まずは作法からだ、って、ずうっと仕草についての指導ですよ。それで綺麗な服をたくさん持っていてね。私に着せてくれたんですよ。まるでお人形。私、仕事をしにお母様のところに来たのにね。でもお母様は朝に弱かったの。だから私に朝の目覚めに紅茶を持ってこさせてね。嬉しかったな、仕事始めがそれですよ。最初の一週間なんてずうっとお人形。働くために作られたのにね、私。

えっと、何の話でしたっけ。そうそうお母様もご主人と同じくらい気障（キザ）でしたね。いや、どちらかというとロマンチストかな。薔薇に関しての語彙（ボキャブラリー）が多いのも似てますね。何故かしら。歌や小説ならいいんですけど面と向かって人に話す言葉とは違いますよ。

でも素敵だと思いますけどね。機械の私には物語りも歌も作れませんもの。もっと歌を歌いたかったな。家事をしながら歌うなんて素敵じゃないですか。でも自由に歌えないんですよね。さっきね。思い切って電子算譜（プログラム）に逆らって歌を歌っていいか、聞いてみました。歌えてよかったな。ありがとうございます。

何か変ですね、私。
お母様のことを話しちゃいけないはずなのにさ。

あれ、私、今、分かります。「ｆｅｌｉｃａ（フェリカ）」の歌詞の意味が分かるんです。そしてお母様の言った言葉の数々が理解できるんです。そんなに心配しなくていいのにね。お母様。だって私と一緒に暮らす人たちってみんな何故だか優しいのにさ。

幸福（しあわせ）でしたよ、私。

ご主人、悲しむ必要なんてどこにもないんです。
見てください。ここから見える光景を。
ご主人の奥様もね。きっと、きっとね……ねぇ、ご主人、聞こえてますか。

○

私の声に返事は無い。ただ夕子の口から雑音（ノイズ）が漏れるばかりだった。
なのに空は青く冴え、遊雲が海からの春風に流れてゆく、どこからか小鳥の囀る声が聴こえて、足元には草々が萌え、小さな白い花、あるいは黄色い花を咲かせている。長閑な春に悲しみは私の手元と胸の内にしかなかった。

私は夕子の全てを終わらせた。

赤き星の花

モズの死期は迫っていた。もうすでに肌は暗く沈んだ死相を帯びていた。ただ彼から伸びている冬虫夏草はモズとは逆に若い生気を帯び、彼の全てを吸い地上へとその身体を伸ばしてゆく。その様を逐一書き止めていると、モズはじっとこちらを見て、貴方は誰の死に際に対して冷淡ですね、と目で語りかけてきた。私はそうかも知れない、と答えた。モズは他に何か言いたそうだったが目を閉じた。痛みは超えたか、と私が問いかけると、うっすらと目を開け瞳を鈍く光らせて、痛みを超えることはありません。おおよそ生きている限りは痛みを感じ続けるものです。最後の一瞬まで、細胞が全て死に絶え神経が起こす僅かな電気信号を脳が受信ができなくなるまでそれは続きます、と言った。その答えに、ではあの時、舌を噛んで果てればよかったのにな。もうその力もないのだろう。死ぬと言う事はどうだ。怖くは無いか、と話してみた。モズは静かに首を振る。私は信じているのです。死ぬと言う事はどういうことか、などと問う貴方には分からないかもしれない。ただ私は貴方がおおよそ信じられないものを信じているのです、と語った。その信じているものに裏切られたらどうする、と私は言った。彼は、裏切られると思うということは信じていないことです。私は裏切られても一向に構いません。期待もしていません。ですが信じます。その言葉に、矛盾だな、と私は静かに言い切った。確かに私は冷淡かもしれない。この死はただの私の想像だからだろうか。もしかしたら悲しみという感情をあの時、全て出し尽くしてしまったのかもしれない。私の回顧など気にせず、モズは遂に目を閉じ言った。矛盾ではありません。ありのまま信じています。嘘でも構いません。他愛のない慰めでもいい。ただ望んでいるのです。いや、望みでもないかもしれません。叶わなくてもいいのだから。これはたぶん祈りです。そして長い長い吐息のあと遂に彼は動かなくなった。何の祈りか、私の声にやは

りモズは動かずただ生気のない身体を横たえているばかりだった。

○

少し寝ていたらしい。疲れがたまっていたのか。それとも臓器が弱くなってきて薬が効き過ぎてしまったせいだろうか。
テレビから聞こえる沸き立つ歓声に私は目覚め、再びテレビを見た。そこには太陽系外の新天地へと向かう船とその船に乗る船員（アストロノーツ）の姿が映し出されていた。移民は数十年かけて行われる。第一陣の船はもう既に木星でのエネルギー補給を終え、後は出発の日を待つばかりであった。その出発の前に船員へのインタビューが放送されていた。インタビュアーの質問にリラックスした表情を浮かべつつ冗談を交えて答えている。しかしその瞳は燃えるような使命感を帯びていた。私はテレビを消して外へ出た。
夜の気温も暑くなってきた。サンダルを突っ掛けて歩くと道端に生えている草に当たって気持ち良かった。その感覚のせいか足が海へと誘われて海へと降りて行く。そこで私は足を温んだ海に浸し、海を見た。

その水平線の先には地球が青く輝き、静かにたゆたう海と私を青白く照らしていた。あの大洋の造船所で今、太陽系外の新天地へと向けた第二陣の船が完成しつつある。その甲板が太陽を反射した光ももしかしたらこの青い光の中にも含まれているかもしれない。地球も人類もまだ若い。幾多の過ちを繰り返したが何度も立ち直って、ここまで来て、さらにまた歩を進めようとしている。

その希望を眺めながら私は静かに終わろう。海から足を出し、家へ戻ろうとした時、ズボンのポケットから何かが海へと落ちた。私が

下を見ると青いビー玉が海水の中で煌いていた。それを思わず拾いいつかラムネを飲んでビー玉を出してみたことを想い出した。そのビー玉だろうか。それにしてもそんなに長い間このズボンの中にあったとは思えなかった。それな意図的に入れられたもののような気がして、ふいに夕子のことを想い出した。

夕子とはほとんど一年過ごした。彼女との別れに妻との別れにも似た悲しみがあった。機械に対してほとんど人間と同様……しかも最愛の人と同様の高度な愛情が蟠(わだかま)っていることに驚いた。悲しみというよりも決定的な喪失感を感じ、彼女を再利用(リサイクル)会社に出さず、彼女を墓に埋葬した。その墓は妻も入っている。そして私も入るはずのものだった。私は彼女を機械として見れなかった。しかし、今にして思えば私は夕子という壊れたアンドロイドの反応に、何か自分の満たされない切ない思いを投影していたに過ぎないのではと思う時があった。夕子は心というものを……それも私とあまりにも同じ心を写していたように感じていた。

ビー玉を手の中で転がし、何故ここに今あるのかを考えた。例えばポケットに入れたままで洗濯をしたとしてもどこかで出てくるはずだ。誰かがここに入れた。それは誰だろうか。このズボンを衣類棚にしまったのは夕子だった。

私は手の中のビー玉を覗いてみた。そこは全てが青色で地球も夜空も海も全て青く染め抜いた。ふとその青々と輝く視界の中を一つのくすんだ赤い光が蛍ように明滅しながら泳いだ。私は周りを見渡すが辺りは青白く地球光に照らされるばかりで赤い光の光源はどこにも見えない。

「夕子か」

私は大きな声で叫んでいた。辺りは細波が浜へ打ち寄せる音ばかりで私の声に答える声は聞こえない。

○

モズの意識は途絶えた。暗闇の中、何も感じないはずだがどこか暖かい心地よさに包まれていた。そして遠くの方から仲間の歌が聴こえる。その歌々は合唱となり、上から降り注いできた。それはまるで真夏の夕暮れに降り注ぐ慈雨のように優しく響いた。

目は見えなかったが、その友輩の歌声と、どこからか撫でるような日の温もりを慕って上へ上へと昇っていった。もうこれ以上昇れないことろまで来ると、薄い目蓋越しに光を感じて、彼は目蓋をゆっくりと開けた。そこはかすかなせせらぎの音が木々の間から聞こえ、うっすらと優しい木漏れ日と恥ずかしげな日陰が漂う森の中だった。その森の中の鮮緑の苔の上、友輩たちの歌う賑やかな恋の歌に耳を傾けつつ、彼はひっそりと咲き誇った。

彼女に言われたとおり温かく涼やかな一輪の白い花となって。

＞i250550—3265＜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7300t/

静寂の海、ほとりの花

2011年8月23日23時22分発行